

かけがわ学力向上ものがたり
—我が校のものがたり 実践編—



「茶のみやきんじろう」©掛川市

令和2年2月
掛川市教育委員会

「子どもたちの未来のために」

「ここがわからない。〇〇さん、教えて。」「これがこうだから、こうじゃん。どうかな?」「なるほど。わかった。」「あれ?じゃあここをこうしたらどうかな?」「あ、それもいいね。それでもいいじゃん。」

教室では、子どもたちが自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、様々な問題を解決しようとして一生懸命取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があります。そして、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」もあります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解をし、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・対話的・協働的に学習に取り組む子どもたちを育ててきました。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

本年度の夏に発行した「我が校のものがたり」において、各校の校内研修における目標と、それを実現するための具体的な方策をまとめていただきました。この「我が校のものがたり 実践編」には、校内でどのように研修を進めていったのか、またその結果、どんな成果や課題が見られたのかが記されています。その中には、学びを深める子どもたち、そして学びを支える先生方の「ものがたり」も記されています。

各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもの学力向上に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

目 次

日坂小学校 岡戸 良太 -----	1
「進んで関わり学び合う子」の育成を目指して	
東山口小学校 山口 真弓 -----	3
進んでかかわり学び合う子の育成を目指して	
西山口小学校 青島 央典 -----	5
「考えをつなぐ授業」を目指して	
上内田小学校 松本 昌幸 -----	7
自ら学ぶ みんなと学ぶ授業づくり	
城北小学校 池田 紀子 -----	9
「学び合う授業づくり」を目指して	
第一小学校 石塚 将大 -----	11
「ともに学び合う」 ～学び合いを通して、「わかった」「できた」が実感できる授業づくり～	
第二小学校 奥川 真智子 -----	13
主体的に学ぶ掛二小の子どもたち	
中央小学校 佐藤 仁美 -----	15
対話を通して学びを深める授業づくり	
曾我小学校 野代 理恵 -----	17
伝え合うことができる子を目指して	
桜木小学校 平野 良直 -----	19
どの子も学び続ける授業の創造	
和田岡小学校 鴻野 裕美 -----	21
みんな楽しい、分かる、できる、授業づくり ～友達と関わり、本気になって取り組む子の育成を目指して～	
原谷小学校 千葉 貴江 -----	23
子どもが学びに向かう力を育む授業	
原田小学校 池田 健 -----	25
論理的な思考力・表現力の育成	
西郷小学校 太田 愛 -----	27
「繋ぐ～共に学ぶ～」を意識した校内研修	
倉真小学校 原田 昌 -----	29
「説明する力を身につけた子」の育成を目指して	

土方小学校	渡辺 智美	-----	3 1
	対話を通して考えを深める授業を目指して		
佐東小学校	竹内 洋介	-----	3 3
	対話を通して考えを深める授業		
中小学校	富井 美帆	-----	3 5
	対話を通して考えを深める授業		
大坂小学校	柘植 未来	-----	3 7
	「心の鐘が響く授業の時間」		
千浜小学校	諸星 江里	-----	3 9
	「主体的に学び合う子」を目指して		
横須賀小学校	阿形 竜馬	-----	4 1
	聞き合い学び合う全員参加の授業づくり ～子ども一人一人の学びを保障する「学び合い」を目指して～		
大淵小学校	石田 智子	-----	4 3
	「自ら考え 自分の言葉で伝え合う子」を育てる授業を目指して		
栄川中学校	大石 優子	-----	4 5
	進んで関わり学び合う生徒の育成		
東中学校	杉山 晃弘	-----	4 7
	きき合って学ぶ「学び合い」の授業		
西中学校	長谷川 景子	-----	4 9
	生徒が自ら学ぶ授業を目指して		
桜が丘中学校	辻元 智	-----	5 1
	深い学びを達成するために		
原野谷中学校	梅田 晃	-----	5 3
	他者の考え×自分の考え=深い学び		
北中学校	萩田 駿	-----	5 5
	「北中型道徳スタイル」の確立を目指して		
城東中学校	小杉 栄乃	-----	5 7
	「対話を通して考えを深める授業」を目指して		
大浜中学校	沢田 佳史	-----	5 9
	生徒の学びを大切にする校内研修		
大須賀中学校	池谷 貴弘	-----	6 1
	「学び合い」の実現を目指して		

「進んで関わり学び合う子」

の育成を目指して

掛川市立日坂小学校 岡戸 良太

目指す姿について

こうすればどう？

ここがわからない。

自分の思いや考えをもち、友達のと考えと比べながら聴いたり、わかりやすく表現したりする中で、課題を解決する姿。

あれ？なぜだろう。

やってみよう。

あれを使って解けるかな？

どっちがいいんだろ？

こういうことだよ。

今年度の取り組み

〈手立て〉

- 1 単元を見通した学習課題の設定（単元構想）
- 2 交流の意図の明確化
 - ・交流の位置づけ
 - ・教師の支援の工夫
 - ・自分の考えをもち、伝え合う場面の設定
 - ・個の変容の見取り

1 単元を見通した学習課題の設定（単元構想）

○授業者が単元のゴールの姿を明確にもち、そのゴールに向かって1時間ごと授業を構成していった。

○子どもの実態を把握し、考えたいような課題を設定できた。

〈5年外国語〉「思い出の物は何？ ”What’s this?”」

「思い出の物のクイズを出したり、答えたりして、友達との会話を楽しもう。」

- ・「言いたい」「伝えたい」があふれていた。

☞ 課題そのものの魅力

自身をもって言えるような前時までの手立て

This is my memorial goods. What’s this?



Hints please.

○子どもと単元の目的を共有することで、必然的に付けたい力に迫ることができた。

〈1年生活科〉「秋と友達になろう」

単元を貫く活動「6年生をあきキラランドに招待しよう。」



本時の課題「6年生でも楽しめるようにするには、どうしたらよいだろう。」

どんぐりめいろを作ったAさんとBさんのやりとり

A アドバイスある？

B 行き止まりを作れば？

A 他には？

B 穴を開けたら？そうすれば6年生にも分かる。



2 交流の意図の明確化

○自分の考えをもたせてから、交流をすることで、友達の考えと比べ合い深めることができた。

○ふり返りを活用して、個の変容を見取ることができた。

〈6年算数〉「分数のわり算」

Aさんの学びの変容

1㎡をもとにすれば、答えが8/15ということは分かった。でも、元の式からの求め方が分からない。



わる数を反対にしてかければよいと分かった。Bさんの数直線の説明で、答えにも納得できた。なぜ逆数にすればよいか考えていきたい。



まだここがわからないなあ。

成果と課題

○単元を見通して課題を設定したことで、子どもたちが主体的に取り組む姿が見られた。

▲付けたい力をより明確にしていくことが必要である。

○自分の考えをもつ場面を設定したことで、考えを比べ合い、学びを深めることができた。

▲交流のやりとりの質を上げていくことが課題である。「伝える」→「伝え合う」

来年度へ向けて

今年度の研修の成果と課題をふまえて、以下の2点を重点に取り組んでいく。

①単元を見通して付けたい力を身に付けさせるための課題設定の工夫

②交流の質を高めるための振り返りの設定

進んでかかわり学び合う子の育成を目指して

掛川市立東山口小学校 山口 真弓

1 本年度の研修の取組

研修の柱を「教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり」とし、「算数」を窓口教科として、以下に記す2点を手立てとして研修を進めてきた。

- (1) 授業のゴールを見直し、そのゴールに向かうにはどのような課題を設定すればよいか吟味する。
※ゴール・・・概念としての知識を習得し、それを既習事項と統合する
- (2) 考えを広げたり深めたりするために学び合いを充実させる。

2 具体的実践

(1) 課題提示を工夫し、子どもに学びの必然性をもたせる

1年算数科 ～繰り下がりのある引き算～

本時では、引き算のやり方を覚え、計算ができるようになることをゴールとせず、「被減数を10といくつと見て、ばらだけでは引き算ができないときは、10のまとまりをばらに崩せば、既習の計算が使えることがわかる」という、概念としての知識を習得し、既習の学びと統合するというゴールを設定した。そしてそのようなゴールに至るためには、どのような課題提示をすればよいか考えた。



子どもにとって「10のまとまりをばらに変える」必然性があり、繰り下がりのある引き算の概念を理解し、これまでの学びと統合することができるような課題を吟味した。そこで、「1袋10個入りのお菓子を開封し、ばらさないとお客さんにあげることができない」という問題場面を設定した。子どもからは、「袋の方から取らないと足りないよ」「袋を開けなくちゃ分けられないんじゃない」と、「10のまとまりとばらに分け、さらに10のまとまりをばらに崩す」という、本時で働かせたい見方・考え方を思わず働かせて発言する姿が見られた。

このような学びを通して、繰り下がりのある引き算の意味を理解することができた。また、被減数を10といくつと見て、「10のまとまりをばらにすれば、10より大きい数でも今までの足し算や引き算の考え方が使える」と、統合的な理解につなげることができた。

(2) 考えを広げ、深める学び合いの充実

2年算数科 ～九九より大きいかけ算～

かけ算の意味を理解し、九九の学習を行った後、九九を超えるかけ算の学習を行った。導入では、三色団子の絵を示し、「全部で団子はいくつ？」と問いかけた。この学習では、「九九を超えるかけ算であっても、既習の形に直せば計算で求める

ことができる」というゴールを設定した。

串に刺さっている団子を見て、子どもたちは「1個ずつ数えなくても3の段が使えそう」という見通しを持ち、「 3×12 」と立式することができた。それと同時に、「『 3×12 』という九九はない」という、子どもにとって切実な課題も生まれた。そこで、「かける数が10より大きいかけ算の仕方を説明しよう」という学習問題を設定した。

C: 今までみたいに、3を12回たせばいいじゃん。 $3 + 3 + \dots$

C: それって、めんどくさいね。

C: それなら、答えを3ずつ増やしていけばいいよ。

T: 今までの考えを生かしたいいい考えだね。

C: 前に●の数を求めたときにまとまり作ったじゃん。今日もまとまりに分けて考えたよ。(図と式で考えている)

T: まとまりを使って考えた〇〇さんの考えを聞いてみよう。

C: ぼくは、12を3と9に分けて、 3×3 と 3×9 をやって答えをたしたよ。

C: ぼくも、12を10と2に分けて、 3×10 と 3×2 をやったよ。

T: 10のまとまりを生かしたいいい考えだね。

C: あーそうか。そういうやり方もあるね。私もその考え方でやってみよう。

考えを広げ、深める学び合いを意識し、子ども同士の発言を教師がコーディネートし、繋いでいったことで、同数累加の考えしかもてなかった子どもが、本時の目標に迫る姿へと高まっていった。学び合いの充実のための手立てを打ったことが、子どもの学びをより深いものにしていくことが感じられた実践であった。

3 成果と来年度に向けて

(1) 成果

- ・ 本時や単元のゴールを見直し、ゴールを意識をした課題提示や発問を教師ができるようになってきたことで、既習事項との共通性に気づき、「前に勉強した〇〇と同じ」と、統合して考えられる子どもが増えてきている。
- ・ 学び合いの目的や意味を子どもたちに伝えたり、具体物、図、式などの思考ツールを身に付けるようにしたりするなど、学び合いの充実のための手立てを打ったことで、子どもたちが自然な交流ができるようになり、話し合いの質が、少しずつではあるが高まってきている。



(2) 来年度に向けて

教師と子どもの思考にずれが生じてしまった授業があった。個と集団の実態をつかみ、教材や教具を吟味して、子どもの思考を幾通りも予想しながら、授業をコーディネートしていく力を教師は付けていく必要がある。また、子どもの素朴な概念を顕在化して課題へと高めたり、解決への糸口にしたりする教師の働きかけができるように、日々の授業から意識していきたい。



1 はじめに

本校では、今年度から研修テーマを「考えをつなぐ授業」とし、新しい教材との出会いによって生まれた発見や疑問を、子どもたちが対話を通して追究していく過程に焦点を当て研修を深めてきました。「考えをつなぐ授業」を具現化する手立てとして、

- ・「知りたい」「分かってほしい」「やってみよう」という欲求を沸き立たせるような学習問題を設定する。
- ・子どもと子どもが考えをつなぐことができるように、教師が出る場面を明確にし、「つなぐ・もどす」ことを意識して授業を行っていく。

を研修の視点として取り組んできました。

2 研修のあしあと①

学習問題を焦点化する

4年社会科、「安全なくらしとまちづくり」での学年研修で、A先生は、「火事が起きると、だれがどのような仕事をしてくれるのだろう」という学習問題を設定しました。子どもたちは意欲的に話し合うことができましたが、話し合いを深い学びにつなげていくことに課題を残しました。そこで、B先生の授業では、以下のように学習問題を焦点化し、子どもたちが考えをつなげていけるようにしました。

C1：消防士さんは、火を消してくれるでしょ。ほかの人たちは何をしに来ているの？

C2：火を消す以外にも、何かしてくれるんじゃない？

ほかの人たちは何をしてくれるのだろう【焦点化した学習問題】

C3：警察官の人は現場で何が起きたか調べているんだよ。

C4：ほかの人が巻き込まれないようにテープも張っている。

～中略～

C5：ガス会社の人にはガスの元栓を閉めに来ているんじゃないの？

C6：そうか。火が付くと爆発しちゃうかもしれないからだ。

C7：やる仕事は違うけど、人の命を守ろうとしていることは同じじゃん。

C8：そうそう、連携して安全を守ってくれているんだよ。

学習問題を焦点化させ、子どもたちが考えをつなぎながらまとめに向かう様子は、深い学びを具現化した授業そのものでした。

3 研修のあしあと②

教師の出番を考える

4年生国語科「ごんぎつね」の学習です。D先生は、最後の場面で「ごんと兵十の心は通じ合ったのか。」を学習問題にして授業を行いました。D先生は授業を二時間構成とし、一時間を一人学びの時間に設定しました。子どもたちがじっくりと考え、自分の思考を整理することで、どの子も話合いに参加してほしいという願いがあったからです。一人学びの時間に、文章を根拠にして読み取ることが苦手なEさんが「ごんが撃たれる前から、二人の心が少しは通じ合っていたと思う。」と書いていることにD先生は気が付きました。そこでD先生は、子どもの思考を深める教師の出番を意識して、授業に臨みました。

話合いの途中～

C1：『ごんぎつねめ』って書いてあるでしょ。だから兵十はごんのことがまだ憎いんだよ。

C2：だから火縄銃で撃とうとしたんだよ。

D先生：なんで火縄銃なの？【教師の出番① 切り返し】

～自然な相談が始まる～

つぶやきを拾いEさんを指名【教師の出番② 意図的指名】

Eさん：驚かそうとしたと思う。

全体：「ああ。」 「確かに。」 「え？」 「ちょっと違う。」

C3：驚かすというよりも、絶対に殺してやろうと思ったんじゃない？

C4：そこまで憎かったのかな・・・？

子どもたちの話合いが進む中、D先生はタイミングを見計らって、**実物の火縄銃(教材用)**を提示しました。【教師の出番③ 思考を深める資料の提示】

C5：え～、火縄銃ってこんなに重い。
こんなので撃ったら死んじゃうよ。

C6：やっぱり撃ったときは、憎かったんだ。二人の心はまだ通ってなかったんだよ。



授業の最後にEさんは、「兵十は火縄銃でごんを殺そうと思って撃ったから、二人の心は通じ合っていなかった。でも、ばたりと火縄銃を取り落としたときに初めてごんの行動に気が付いた。そのとき二人の心は通じ合ったけど兵十は後悔をしたと思う。」とまとめました。教師が出番を意識して授業を行うことで、子どもたちの深い学びにつながりました。

自ら学ぶ みんなと学ぶ授業づくり

掛川市立上内田小学校 松本 昌幸

1 「自ら・みんなと」が今年の合言葉

上内田小の重点目標は、「自ら・みんなと学び続ける子」です。授業の中で、子どもたちの良いあらわれをたくさん見つけることができました。

2 自ら学ぶ

1年生の算数「かたち」の場面です。Aさんは、与えられた課題に対して正確に取り組む一方で、自分から友達と関わりながら学びたいと考えていました。授業中「平らなところを紙に書き写す」場面がありました。1年生にとって最初は難しい様子でしたが、教師が三角柱の平面を実際に写す見本を見せると、「あー、なるほど!」「わかった!」「早くやってみたい!」と次々に主体的なつづやきに変わっていき、表情も笑顔になりました。Aさんも、活動の見通しがついたことで、自らやってみようという気持ちになりました。その後、写し取った面をペアで紹介したり、4人グループでクイズ大会をしたりする場面を設けました。Aさんに、教師がさりげなくそばに寄り添いました。教師が「このやり方でいいね。」とうなずくと、Aさんは安心して、自信をもって友達と関わっていました。その後も、友達を選んだ形を予想しながら、友達と楽しく関わって学ぶことができました。



3 みんなと学ぶ

3年生の算数「引き算の筆算」の場面です。Bさんは、真面目な態度で授業に取り組む一方で、友達と関わり合いながら自分の思いを表現することが課題でした。そこで、グループの中を言葉で説明する役、筆算を書く役、ブロック操作をする役、お助け役に分担して、協力しながら筆算の説明をする場面を設けました。Bさんは、言葉で説明する役になり、ヒントコーナーで何度も練習してきた成果もあり、とても上手に説明していました。しかし、言葉が早すぎて、他の役が追いつかないよう

でした。その時、お助け役のCさんが、「ちょっと待ってて、ここまで書けた？」と3つの役の進行を調整しながら進めました。Bさんにとって、筆算が解けただけでなく、理解が難しい友達にわかりやすく説明したり、他の子の進行に合わせてながら話したりすることができた1時間になりました。



4 職員も「自ら・みんなと」学び続ける

上内田小では、校長や教頭も含む、全職員が授業公開をしています。5年生の算数「体積」では、校長が授業を行いました。1 cm³が60個積み上げられた直方体を一人一個提示して、体積を問いました。「60個数えるのは面倒だ。」「下は12個あるからこれを使って・・・」「そうだ、下の12個も面積の公式を使えば楽だ。」次々と出てくる5年生のつぶやきから、直方体の公式が少しずつ導かれていきました。「自ら・みんなと学ぶ」5年生の様子を全職員で参観し、教材研究の大切さを再確認しました。また、担任以外が授業をすることで、いつもとは違う視点で子どもの良さを見ることができました。全職員で授業を公開して、全職員で子どもたちの良さを見ていく、上内田小で大切にしている伝統です。



5 おわりに

「自ら・みんなと学ぶ」ことが、子どもたちにも職員にも合言葉のように浸透してきました。来年度は、「みんなと」学ぶことを特に重視して、学び合いで深い学びになっていくよう、子どもたちの具体的なあらわれから研修していきたいと思っています。

「学び合う授業づくり」を目指して

掛川市立城北小学校 池田 紀子

1 本年度の研修について

本校では、研修主題「学び合う授業づくり」サブテーマ「『確かな学力』の育成」とし、「学習問題を設定する場面」「全体で話し合う場面」に焦点を当て、手立てを講じ、学び合う授業づくりの実現を目指して研修を進めてきました。

2 「学習問題を設定する場面」での手立ての工夫（2年 算数「かさ」）

授業は紙芝居から始まりました。紙芝居で問題場面を確認した後、2種類のペットボトルを見せた教師。「どちらの水が多いか。」と聞くと、

「細いペットボトルと太いペットボトルがあるから、わかんないよ。」「同じ大きさのパックに入ればいいよ。」「紙コップを使ったら？」等、子どもたちは口々につぶやき始めました。自然と

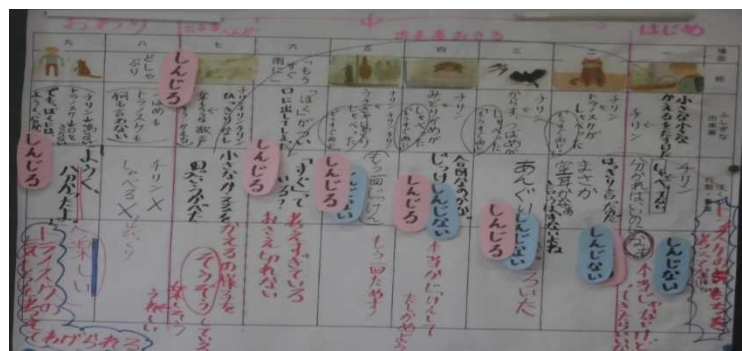
学習問題「どちらの水のかさが多いか、どうすれば比べられるかな。」に入り、子どもたちは予想した後、ペアで考えた方法でかさを比べる活動に入りました。自分の予想が正しいか知りたいという思いから、意欲的に活動に取り組む姿が見られました。



この授業では、形の違う容器を使い、見ただけではどちらが多いかわからない水の量を設定したことで、子どもたちが自然と「考えたい」「試してみたい」という思いをもつ学習となりました。導入から学習問題までの流し方の大切さを学んだ授業となりました。

3 「全体で話し合う場面」での手立ての工夫（3年国語「もうすぐ雨に」）

「動物がしゃべる」という現象を、信じているか、信じていないか、場面ごとのぼくの気持ちの変化を追う学習でした。話合いの途中でAさんが、「（場面が進むごとに）だんだん信じる気持ちが大きくなっていったと思います。」と発表すると、「だんだん上がって行って、最後



（9場面）には信じている。」とBさん。先生が、発言の通りにカードを上の方に

はると、Cさんが「7場面まで上がって、9場面で下がったと思う。だって動物がしゃべらなくなったから。」と発表。「でも、信じている気持ちはあるよ。」「聞こえなくなっても、信じている気持ちは上がっているよ。」「でもしゃべっていないよ。」ざわざわ……。最後の場面の、「信じる」「信じない」の意見が分かれ、話し合いが白熱してきました。

この授業では、教師が「信じる」「信じない」のカードを動かしながら話し合いを進めたことで、視覚的な支援にもなり、どの子も同じ土台にのれ話し合うことができました。また、自然と意見の相違も明らかとなり、話し合いが活発となりました。意見の相違を明確にすることが学び合いにつながるということがわかりました。

4 「全体で話し合う場面」での手立ての工夫（5年 国語「天気を予想する」）

いくつかの資料から本文に合う資料を自分で選び、班で相談した後、班ごとの意見を発表していく場面でした。3つ目の班が、「このページには、気象レーダー（の写真）か気球による上空観測（の写真）か迷っています。」と発表しました。すかさず先生が「今、大事なこと言ってましたね。」と声をかけました。「迷ってる……」と答える子どもたち。全体の話し合いに興味を示してなかったAさんも、この部分には反応を示しました。なぜなら、その疑問について班の話合いでは、納得する結論にいたらなかったからです。Aさんは、答えが分かるのではないかと、キョロキョロ周りの様子を見ながら、話合いを聞いていました。「他に迷っているところは？」と聞くと、Bさんの発言に対して今度はCさんが、「やっぱし！みんなそこ悩んでたんだ！」とうれしそうに反応。この後、筆者が選んだ資料と子どもたちが選んだ資料を比べ、その違いに驚くことになるのですが……。残念ながら、本題に入る前に時間が来てしまいました。

今回の授業では、班で話し合ったことをただ発表させるだけでなく、意図的な順番で発表させたり、子どもたちのズレを明らかにしたりしたことで、友だちの発表に興味をもって聞く姿が見られました。全体での話し合いは、意見の出し合いをする場でなく、子どもの疑問を焦点化したり、何について深く話し合うか教師が見通しをもっていたりすることが大切だと共通理解できた授業となりました。

5 成果と課題

本年度研修を進めていくなかで、「学習問題を設定する場面」では、手立てを講じたことで、子どもの考えたいという意欲をひき出すことができました。しかし、「全体で話し合う場面」においては、まだ一部の子だけで話し合いが進んだり、話し合いが深まらないで終わったりと課題が残っています。学び合いを通して深い学びが生まれる授業を目指し、来年度に向けて研修を進めていきたいです。

「ともに学び合う」

～学び合いを通して、「わかった」「できた」が実感できる授業づくり～

掛川市立第一小学校 石塚 将大

1 自分で考え 進んで行動

授業の中で、本校の重点目標である「自分で考え進んで行動」の姿が見られるように、校内研修では、「学び合い」を取り入れている。本校では、「学び合い」の授業を、以下の3点で定義している。

- ・学級のどの子も見捨てられない、孤立しない、全員参加の授業
 - ・互いに聴き合うことを大切にして、仲間に受け入れられたことが実感できる授業
 - ・仲間とともに課題解決することで、「わかった」「できた」を実感できる授業
- 実践している学び合いが子どもの「わかった」「できた」の実感につながるようするために、昨年度までの研修の積み上げを土台とし、「付けたい力を明確にすること」「子どもの姿から授業を見直すこと」の2点を意識して、研修を深めてきた。



2 子どもも教師も「学び合う」ために ○付けたい力を明確にして授業を行う

授業を通して子どもに付けたい力を具体的にするために、授業案の終末に本時のA評価、B評価を子どもの姿で明記した。ねらいが明確になることで、授業中の言葉掛けや手立てが的確になり、授業の本質に迫ることができた。5年算数「小数のわり算」では、あまりの処理が学習問題となった。学び合いの中での「余りが1だと変じゃない？」の発言をきっかけに、図で考えたり、前時までの学習を振り返ったりすることで、余りが1ではなく0.1であることが「わかった」瞬間であった。



○子どもの姿から授業を見直す

付けたい力を身に付けることができたかどうか見取るために、中心授業公開ではグループごとに着目する職員を決め、具体的な子どもの姿で語り合う事後研を行った。そうすることで、今まで以上に子どもの姿から授業を振り返ったり構想したりする意識が高まった。特に3年国語「ちいちゃんのかげおくり」では、教材研究会を全職員で行った。その結果、空から降ってきた家族の声とかげおくりをして幸せ

だと考えていた子どもたちが、「少ししかかじる力がないよ。」「1の場面は4人だったけど、4の場面は1人だよ。」と本文の叙述をもとに学び合い、場面の移り変わりによる気持ちの変化が「わかった」と実感できた。



○その他の手立て

- ・目指す授業像を子どもとともに考え、各教室に掲示した。
- ・佐藤雅彰先生を講師として招聘し、中心・公開授業だけでなく、校内研修への助言をいただいた。

こうした手立ても、大変効果的であった。

3 本年度の取り組みの成果と課題

<成果>

- ・友達の意見を聴く、友達に尋ねるなど、「聴くこと・訊くこと」ができるようになり、多くの子が自分の考えをもつとともに、「わかった」「できた」を実感することができた。
- ・本時の目標、学習問題、まとめ・振り返りの一貫性を意識して授業を構想することができた。
- ・具体的な子どもの姿で評価を考えることにより、本時の付けたい力を明確にした授業を行うとともに、子どものよさをさらに見取ろうとする意識が高まった。

<課題>

- ・ペア・グループの学び合いで出された子どものよい考えや課題を、全体学習で生かすことが難しかった。
- ・学力が高い子でも、1人では解決できず、探究していけるような問題（ジャンプ課題）も扱っていく必要がある。
- ・付けたい力が備わった具体的な子どもの姿でA評価・B評価の設定をしたが、うまくいかないことがあった。

4 さらに学び合いを深め、「わかった」「できた」を実感させるために

これまでの3年間は、「わからない、困ったが言える」、「自分の考えをもつことができる」のように、全ての子が学びに参加できるようにすることに焦点をあてて、研修を進めてきた。3年間の成果を土台として、来年度は単元でどのような学び合いを進め、ジャンプ課題の位置づけや、難易度等について研修を深め、子どもたちの意欲や力をさらに高めていきたい。

主体的に学ぶ掛二小の子どもたち

掛川市立第二学校 奥川 真智子

1 主体的に学ぶ児童を育てる授業

「主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり」を研修主題として、子どもたちが問いに対峙し自分の考えをつくり、友達と交流しながら考えを深めていく授業を目指したいと考えました。主体的に学ぶ姿とは、課題から問いを見つけ「解決しよう」と熱心に問題に取り組み考えを作る姿、友達との対話を通して、共通点や新たな問いを見つけ考えを深めていく姿と考えました。その姿を目指し、研修の重点を「児童が解決したい課題や問いの設定」「目的を明確にした対話と思考の工夫」とし、研修を進めてきました。

2 児童の「解決したい」を引き出す課題の工夫

① 必要な部分を隠して、条件を引き出す 〈5年生算数「図形の合同」〉



必要な部分をあえて隠すことで、子どもたちの知りたいという思いを引き出すことができます。授業が始まると、何も言わず三角形の図形を10秒間見せました。その後、図形を隠して「今、見せた三角形と合同な図形を書いて」と投げかけました。すると、子どもからは、「辺の長さが知りたい。」「角の大きさがわからない。」と様々な反応が返ってきました。そこで、辺BCの長さのみを提示し、「後、どこの大きさがわかればかけるか」と問いかけ、少ない条件で描けるとよいことを投げかけました。すると、「角Aがわかればいいんじゃないかな。」「いくつわかれば描けるかな。」「辺ABと角Aが分かれば描けるよ。」と、グループでクロストークをしながら、合同の図形を描こうと条件について話し合う姿が見られました。

② 具体的操作を入れ、問題解決の見通しをもたせる 〈1年生算数「ひきざん」〉

1年生にとって、問題場面の理解が難しい子もいます。そこで、具体的操作を取り入れ、視覚的に場面の理解をさせ、問題解決の見通しをもたせることをねらいました。

授業が始まるとすぐに、子どもたちの名前を突然呼び、立つように伝えました。子どもたちは驚きながらも一人、二人と立っていきました。男の子8人、女の子5人が立った時、「男の子と女の子どっちが何人多い」と学習課題を提示しました。すると「並んでみればわかるよ。」「男の子の方が4人多いよ。」と計算の方法についての意見が次々と出ました。問題解決の見通しをもたせるだけではなく、子どもたちの「考えたい」を引き出すこともできました。



3 思考し続ける対話を

4年生理科、「ものの温まり方を調べよう」の学習場面です。前時では、温めることで石けんの膜が膨らむ実験を行い、横向きでも下向きでも石けんの膜が膨らむことから、温めると空気が膨らむことを理解することができました。それと同時に、子どもたちは「冷やすとどうなるのか」「もっと温めるとどうなるのか」と新たな問いをもちました。その問いをもとに学習問題「空気を閉じ込めたゼリーの位置は、どのようにかわるのだろうか。」が生まれました。

Aさんに注目をしました。Aさんは、友達の見解を真剣に聞き、対話を通して自分の考えをどんどん深めていった子の一人です。対話をする前、ゼリーが上がる理由を熱が関係あるとだけ考えていたAさんでしたが、対話を通して、熱で空気が膨らむこと（体積の変化）に気づきました。

Bさん：Aさんと同じで、熱いから上に行って、下にスペースができるんだよ。
Cさん：スペースがなくなるのは、違うよ。何もないスペースなんてないよ。
Dさん：温められると空気は破裂みたいになるから上がるんだよ。冷やされるとなくなるんじゃないかな。
Aさん：あー、破裂するのか。うんうん（うなづき）
Eさん：空気はなくなるんじゃなくて小さくなるよ。小さいつぶみたいに。
Fさん：熱が空気に伝わってふくらんだんだよ。
Aさん：なるほど！破裂じゃなくて、空気が膨らんで大きくなるんだ。（つぶやき）



Aさんは、友達の見解に頷いたり、つぶやいたりする等友達の見解の意図するものを理解しようとしながら聞いていました。授業後に感想を聞くと、「友達の話聞いてイメージが湧いたよ。」と笑顔で応えたAさん。対話することの意義や対話を手段に追究する楽しさを感じていたのではないかと思います。クラスみんなが「解決したい」という思いをもって、一人一人が考えをもち、意見をつなぎ建設的なやりとり

りをしたから、更に解決したいという思いが膨らんできたと考えます。

4 つながる力をつけるために

子どもたちの「解決したい」という思いを引き出すことで課題に主体的に取り組む姿、目的を明確にすることで友達との対話により考えを深めたり、更に思いを膨らめたりする姿を多く見ることができました。今後も、子どもたちが対話を通して、学びの深まりを実感できるような授業を目指していきたいです。そのために、次年度は「子どもの意見がつながる対話と思考」を研修の柱として、教師の手立て、出番や学習問題等を工夫すると共に対話では目的の明確化、相手の場面、状況を意識させながら応答を繰り返し、思考が深まっていく授業作りを目指していきたいと考えます。

対話を通して学びを深める授業づくり

掛川市立中央小学校 佐藤 仁美

はじめに

本校では、「対話を通して学びを深める授業づくり」を研修テーマとし、昨年度の課題であった事前研修を充実させながら「学びを深めるための対話」について考えてきました。設定する対話には「その対話を行う意味や必要性」があることや「聴く」「話す」の質の向上が、よりよい対話をつくることを実感する研修となりました。

「3 BIG」を生かした対話力の向上

中央小では、3 BIGという「聴く」「話す」「意欲」の3つを柱とした目標があります。「聴く」は「BIG EYES」、「話す」は「BIG VOICE」、意欲は「BIG HEART」と呼んでいます。1年生から6年生まで共通した態度が示されていて、子供たちは中央小学校へ入学した時から、この3 BIGを意識した生活を送っています。

ステージごとに、学びづくり部長がそのステージでの目標を全校に伝え、子供たちに意識づけをします。そして、子供たちはステージごと目標をもったりふり返りをしたりしながら取り組んでいます。朝の会でクラスのみinnで唱える学級もあれば、帰りの会に、3 BIGができたか確認をする学級もあります。授業の終わりに教師から「今日はたくさんの方が BIG VOICE で発表できたね。」等と声を掛けられると誰もが笑顔になります。3 BIGの意識が高まると、授業の中での対話がより充実したものになります。

10月、2年3組で「かけ算」の中心授業を行いました。2年生が初めてかけ算に出会う授業です。遊園地の様子を観察し、かけ算で表すことができる場面を見つけて友達と交流し、身近にかけ算があることを感じていく授業でした。授業の中には4つの対話場面が組み込まれていて、不安を自信に変える対話や、自分の考えを伝え合い正しいかどうか検討し合う対話など、それぞれに対話の目的が違いました。そのような質の違った対話を重ねていくことで、子供たちの学びを深めてい



ペアで絵から分かったことを話し合う活動



自分の考えを伝え合い
検証する活動

くことができました。この授業でも、「相手の方を見て」や「うなずきながら」等、自然に3BIGで聴いたり話したりする姿が見られました。

ステージごとに実施する児童アンケートの結果では、どのステージも約90%の児童が「3BIGで授業を頑張っている」と回答し、3BIGへの意識が高いことが分かります。また、12月の3BIG達成状況調べでは「相手の方を見て聴く」や「みんなの方を見て話す」等、相手意識をもって取り組んでいる割合が高くなっており、対話に対する意欲が高いことが分かります。

一方、中央小の傾向として、「話すこと」よりも「聴くこと」の力がまだ不十分だと感じることもあります。「聴く」ことがより良い対話を生んでいくことを授業の中で感じていけるような授業づくりに取り組んでいきたいです。

外国語活動での対話

本校では、外国語活動にも力を入れています。朝活動で「モーニングE」を月2回行っています。全校放送でフォニックスや英語の歌、英語の本の読み聞かせ等を行っています。この活動は何年も前から続けていますので、高学年は聴き慣れていて、継続することでさらに理解を深めています。分かりやすい内容がテンポ良く放送されるので、低学年の子供たちも自然と英語に親しむことができます。

このような低学年からの積み重ねが、外国語に対する抵抗感を減らし、外国語をより身近に感じ、学ぼうとする意欲につながっています。外国語の時間を楽しみにしている児童も多く、友達や先生と笑顔で対話をする姿がたくさん見られました。子供たちが対話の心地よさを実感するとともに、外国語をもっと知りたいという学びの深まりを感じるようになりました。



モーニングE「Rainbow song」を聴きながら色と英語の音を合わせる活動



友達と楽しく、コミュニケーション活動をしている様子

終わりに

対話は「他者との協働」の中にあります。中央小は「3BIG・あったかアクションでかがやこう」が重点目標であり、聴く力「BIG EYES」や話す力「BIG VOICE」の高まりが、質の高い対話につながっていくと考えています。事象に対して「自分ごと」として捉え、「相手の話を聴きたい」「自分の考えを聴いてほしい」という思いをもった対話ができる子を増やし、子供たちの学びの深まりにつながるように、これからも研修に励んでいきたいと思えます。

伝え合うことができる子をめざして

掛川市立曾我小学校 野代 理恵

人権教育の指定2年目

今年度は、曾我小が人権教育の指定を受けて2年目です。伝え合うことができるということは、相手を意識した聞き方・話し方ができるということです。つまり、人権意識が土台にあるというおさえで研修を続けてきました。今年度は、「仲間とともに伝え合いながら、課題解決できたか。」という点を切り口に研修を進めてきました。

2年 算数科「長さ(1)」(7月)

「長さ(1)」の第2時です。第1時では、班ごとにおはじきゲームを行いました。各班でおはじきをとばし、誰が一番遠くまでとんだかを班ごとに違う物(ブロックなど)を使って考えました。第2時では、学級で誰が一番とんだかを考えました。

教 誰がおはじきを一番遠くまではじいたか考えよう。誰だと思う？

全 えー、わかんない。

A 2班は、ブロック32個分とんだと言いました。「32」は十の位もあるし、数がすごく大きいから、2班の「32個」が一番遠くまでとんだと思います。

B (つぶやき) よく分かりません。

C 1班(25個分)はブロックが大きくて、2班(32個分)はブロックが小さい。

D ぼくは7班(7個と半分分)だと思えます。1班や2班は、数は多いけどブロックが小さい。7班はブロックが大きいから、7班だと思えます。



E ブロックの長さを比べてみて、同じくらいだったら数が多い方がとんだ。

F Aさんは2班だと言いましたが、私は違うと思えます。なぜ2班じゃないかという、ブロックが小さいとブロックの数が多くなるからです。数は少ないけど大きいブロックの方が、遠くにとんだのかもしれない。ブロックの数は関係ない。

教 聞いてみるよ。1班だと思える人。2班だと思える人。…(順に挙手させる)

G (つぶやき) 分かんない…。

教 Gさん、なんで分からないの？

G ブロックや積み木は、長さが同じかもしれないし、違うかもしれないから。

F ブロックや積み木の長さが同じじゃないと比べられない。

教 もとにする長さが違うから比べられないってこと？(板書・焦点化)

どうすればみんなの長さを比べることができるだろうか。

H 同じ〇とか定規とかで比べたら、長さも比べられる。

教 Hさんの言いたいこと分かる？

F 同じ定規とか、同じ物を使ってやれば、誰が一番遠くまでとんだか分かる。

単元を貫く学習課題が練られていたため、子どもの「比べたい」という意欲をかき立てました。事前研修で単元計画について練り、学習指導要領から付けたい力を考えた成果だと思われます。そのため、本時では、どの子ども考えたくなる学習問題を立てることができました。また、子どもたちから出された「分からない」「知りたい」という思いを教師が整理して、学習問題へとつなげていきました。子どもの言葉を拾って、子どもに返し、学習問題を焦点化することができていたと思います。

人権教育研究発表会での授業公開

4年 社会科 「地域の発展に尽くした先人」(11月)

4年生の授業でも、子どもの思考に沿った学習問題を研究しました。初めは、少し高度な学習問題にしようかと考えていましたが、事前研修で、そもそもこの単元は時代背景を考えることが難しいため、どの子ども考えを思いつくような学習問題の方がよいのではないかという意見があり、考えやすいものに変えました。すると、授業では、どの子ども自分の考えをもつことができ、ほとんど全員の手が挙がりました。授業を参観してくださった方からも、どの子ども集中して話し合いに参加していて素晴らしいというお褒めの言葉をいただきました。

日ごろから子どもの思考に沿って単元の流れを考えてきたことで、子どもたちの学習意欲がより高まりました。公開授業の前には、吉岡彌生記念館に見学に行くと、子どもたちは吉岡彌生を身近に感じ、かつ、尊敬するようになりました。休み時間にも「彌生先生は・・・」「家でも吉岡彌生クイズを出しちゃった」などの会話が聞こえるようになり、家でも話題に上がるようで、家族で記念館を再訪した子ども何人かいました。

また、単元の終わりに書いた「掛川偉人ブック」には、「掛川市に生まれてよかった。」「偉人の方々に感謝。」など、地域への愛情が育っている言葉がたくさん書かれていました。

人権教育を意識した授業を創る

45分の授業時間を守る、めあてとまとめを明らかにして板書するなど、授業の見通しをもち、「基本」と言われているような授業をすることが、まずはどの子ども学びの土台に上がることだと考えました。そして、考えを伝え合い学び合っていく、これこそが、授業における人権教育だと思います。特別なことをしているわけではなく、子どもと教師が45分の授業時間の中で、学習課題に対して共に追究していく、そして、このことを積み上げてきた結果、人権教育という視点からもよい授業になったのではないかと考えます。

どの子ども学び続ける授業の創造

掛川市立桜木小学校 平野 良直

1 子どもたちの主体性を引き出し、学びを深めるために

本校のめざす子は「学んでいく子」です。学んでいくためには、主体的に学習に取り組む姿勢が大切です。友達と対話しながら学びを深めていくことで、学びがつながっていき、「学び続ける子」に育っていきたく思います。そのような子どもたちを育てるために、本年度は、「子どもたちが主体的に解決したくなる単元構想」と「子どもたちの学びを深めるための全体整理」を柱に研修を進めました。

2 子どもたちの心が動いた瞬間

<4年算数「1けたでわるわり算」>

72÷3のような2桁÷1桁のわり算の筆算ができるようになった子どもたち。本時は、3桁の筆算にチャレンジしています。問題は、536÷4。子どもたちは、今まで学習してきた通り、大きい位から筆算を始めます。

「百の位は、5÷4だから百の位に1をたてて、 $1 \times 4 = 4$ 。 $5 - 4 = 1$ 。次はおろすだから、……!？」
なぜか子どもたちの手が止まってしまいました。実は、十の位の3と一の位の6を一緒におろしてしまっていたのです。



$\begin{array}{r} \\ 4 \overline{) 536} \\ \underline{4} \\ 1 \end{array}$	$\begin{array}{r} \\ 4 \overline{) 536} \\ \underline{4} \\ 13 \\ \underline{12} \\ 1 \end{array}$
--	--

「あれ!?! 136÷4? かけ算九九ではできないよ……。」

この瞬間、子どもたちに「解決しなければならないこと」(問い)が生まれました。子どもたちは、自分の考えをノートに書いたり、グループでホワイトボード

を使って説明したりする中で筆算のやり方を理解していきました。

この研究授業をきっかけに、「子どもたちの主体性には、『問い』が大切である。」「子どもたちは、どんな『問い』をもつだろうか?」「だとすれば、子どもたちの『問い』を引き出すためには?」という学び手の視点に立ち、『問い』を視点においた授業づくりが進んでいきました。

< 6年算数「速さ」 >

単元の基本的な内容を習得した子どもたち。本時は、習得した力を活用し、応用問題にチャレンジしています。

T：先生は、車を運転して家からA地点までを同じ道で往復しました。行きは時速40km、帰りは時速60kmで走りました。先生の車の平均時速は、時速何kmでしょうか。

C：「平均だから時速50kmじゃない？」

子どもたちは、「平均だから時速50kmではないか？」「まさか、そんな簡単に答えが出るわけがない。」と予想していきます。ここで授業者が、

T：「平均時速は、時速50kmではありません。」

と、子どもたちに伝えます。今までの平均の考え方では解けない問題に出会った子どもたち。首をひねる子、近くの子と話し始める子。教室がざわざわします。

T：「一人で解きたい人は、隣の教室でどうぞ。グループで解きたい人は、自由にグループをつくってどうぞ。」

授業者は、学び方に選択肢を与えました。学びを進めていく中で、速さを求めるには、道のりが必要である



ことに気づき、「先生、道のりは何kmですか？」という声も聞こえてきました。

この授業を通して、問いだけでなく、問題や追求課題の難易度設定も重要であることが分かりました。どこまで情報を与え、どのような学習形態で学ぶと、子どもたちが一番達成感を覚える学びにつながるのか。一人一人の学びに目を向けることで、単元構想の重要さに気づき、さらに研修が深まった1時間でした。

3 令和2年度の研修につなぐ ～子どもたちの学びを深める～

令和元年度は、子どもたちの問いを核に、学び手の視点に立った授業改善を進めていくことができました。子どもたちが興味・関心をもつような追求課題を子どもたちの思考の流れでつくることで、主体的な学びにつなげていくことができました。その中で、追求課題に対して子どもたちの考えを広げるだけでなく、広がった思考を付けたい力に収束させていくことが、本校の次の授業改善であることが見えてきました。確かな学力を子どもたちに育むために、授業改善のものがたりを令和2年度につないでいきます。

みんな楽しい、分かる、できる、授業づくり

～友達と関わり、本気になって取り組む子の育成を目指して～

掛川市立和田岡小学校 鴻野 裕美

本年度は、研修主題「みんな楽しい、分かる、できる、授業づくり～友達と関わり、本気になって取り組む子の育成を目指して～」を目指し、研修の柱①「魅力的効果的、短時間でつかめる導入の設定」と柱②「ふりかえりの視点を明らかにし、積み重ねていくこと」について、取り組みました。授業の導入では、「ふかみ」（ふ→復習、か→簡単、み→見える資料で）を合言葉に、十分な交流時間が確保できるような工夫を考えてきました。ふりかえりでは、「わかった」（わ→分かったこと、か→考えたこと、つ→追究したいこと、た→楽しかったこと）を子ども・教師も共有し、その授業や単元で学んだことを自分の言葉でまとめ、基礎学力の定着を図ってきました。

学びの土台作り

本校では、どの子どもも安心・落ち着いて学習ができるよう「授業5原則」と「わだおかUD支援」を基盤として、学びの土台を作ります。「授業5原則」は、桜が丘学園として統一して取り組んでいます。子どもが学びに向かう意欲を、学校と家庭で共通意識を持ち支えています。また「わだおかUD支援」とは、「㊦かりやすい、㊦まって動ける、㊦もいやりのある、㊦んがえたくなる」4つの意識です。教室の全面掲示を全校で

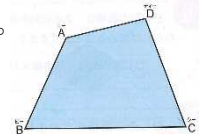
統一したり特別教室などの道具を整理整頓したりして、誰もが学びやすい環境づくりを意識してきました。



「同じ土俵に乗せる」導入

5年生算数「図形の面積」の学習です。授業が始まるやいなや、「先生、今日は○角形の面積でしょ。」と明るい表情で子どもが言います。授業者は「長さが書かれていない四角形」を提示します。

右の図の面積を求めよう。

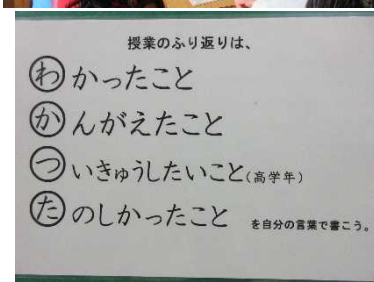


「この図形はなんでしょう。」すると、子どもたちから次々つぶやきが出ます。「台形かな。」「ちがう。台形は向かい合った辺が平行だけど、これは平行じゃない。」「ただの四角形だ。」そこで、授業者が「どうやって求める?」と子どもたちに投げかけます。「倍にして切る。」「三角形と三角形にして足す。」「BCを底辺にして、そこに垂直な線を描き…。」

たった5分のできごとでした。子どもたちは課題をつかみ、既習の図形の体積の公式を想起して「どこを測ればいいか」を検討していきました。この表れは、1時間で身に付いた力ではありません。単元を通して、「自分たちで新しい基本図形の求積公式」を導き出す経験を積み重ねてきたことで、数学的な見方や考え方が育っている姿なのだと感じました。この後、子どもたちは授業の最後まで粘り強く思考し続けたのでした。

「分かったこと」が実感できたふりかえり

2年生算数「かけ算」の授業です。「 12×3 の計算の仕方」を考えます。Hさんは、「まるかず作戦（12個の丸を並べて書き、それがひとつかたまりで3個分。 $12+12+12=36$ とする考え方）で考えよう。」と決め、ノートに丸を36個書いていきます。同じ班のYさんは「僕はたしかけ作戦（ 12×3 を 4×3 、 8×3 等に分けた考え方）で3つもできたよ。」と話し始めました。Hさんの表情は曇ります。全体の発表でも、まるかず作戦、たしかけ作戦、その他いくつかの考え方が出てきました。「どのやり方もいいね。」「まるかず作戦は、分かりやすい。簡単に書ける。」「だけど丸をたくさん書いて時間がかかるよ。」子どもたちが気づいたことを口に出していきました。Hさんは、黙っていました。その後、 3×13 の練習問題で、Hさんの考えが変わったことに気がきました。「 3×13 を $3 \times 4 + 3 \times 9$ 」に分けて考えていたのです。Hさんのふりかえりには「初めはまるかず作戦がいいと思っていたけど、たしかけ作戦の方がいいと分かりました。理由は、早くて簡単だからです。」と書かれていました。友達との学びの中でHさん自身の学びの変容を自覚できた場面でした。



成果と課題

○導入で実物を見せたり実演をしたりと工夫することで、子どもの学ぶ意欲が高まりました。また、 $\textcircled{1}\textcircled{2}\textcircled{3}$ をパターン化することで前時の学習を思い出すことができ、すぐに学習問題をつかむこともできました。

○ふりかえりが習慣化することで書くことが積み重なり、自信をもてたり知識となったりして子どもの力になりました。（令和元年度11月の学校アンケートでは、児童の90.4%が「授業が分かる。」と答えている）

▲子ども達が主体的に交流活動をしていたとは言い切れません。「分からない」「自分の考えを話したい」「くらべたい」という子どもの気持ちが対話を生み出すことを教師も学ばなければなりません。

本年度の研修を通して出てきた成果や課題を見つめ直し、来年度は「かかわりの中で主体的に学んでく子どもの育成」とし、研修に取り組んでいきたいと考えています。「チーム和田岡」として誰もが「わかった!」「できた!」と喜び合える授業づくりを行うため、授業改善に励んでいきたいと思えます。

子どもが学びに向かう力を育む授業

掛川市立原谷小学校 千葉 貴江

本年度は、研修主題「子どもが学びに向かう力を育む授業」を目指し、研修の重点として学習課題と子ども同士の関わり合いを視点にして研修に取り組みました。本校では、「授業設計アイデアシート」を活用し、授業改善に取り組んでいます。

子どもが主体的に学びに向かうためには、最初に提示される学習課題が大切になります。子どもの実態（今までどんなことを学んできたのか、学習の定着はどれくらいかなど）を把握することに努め、子どもの反応や思考の流れを予想した上で、どうすれば子どもにとって魅力的な学習課題となるか、研修を進めてきました。また、本年度は何のための関わり合いか、教師が目的を意識した上で関わり合いの活動を取り入れるようにしました。



算数の授業実践から

3年生「たし算とひき算」の学習では、学区内のお茶農家で、子どもたちがお茶摘みをした体験を想起させることから始め、摘んできたお茶の葉の合計を求めるという学習課題を設定しました。子どもにとって身近な話題を学習課題とすることは、学習意欲を高めるために効果的であると考えたからです。

ゆうさんは 302 枚、まきさんは98枚摘みました。合わせて何枚摘みましたか。

更に、子どもに必要感や切実感をもたせることができると考え「筆算を使わない」という条件を出しました。すると子どもたちは「え、筆算できないの？」とざわつき始めます。「だってみんな、茶摘みのときに紙と鉛筆は持って行かなかったよね？」と教師が言うと、納得した様子の子もたち。「どうする？」「暗算では無理だよな。」「じゃあ、2を動かして98を100にしてみようよ。」と、すでにそこかしこで話合いが始まっています。授業を通して、暗算の仕方を工夫することで、筆算をしなくても計算ができるという手応えを多くの子が感じていました。



授業の終盤には学習したことを生かして計算できるように、ペアで問題を作り、確かめ合う活動を教師側が準備していました。ところが、期待していたような関わり合いは生まれず、個人の作業となってしまいました。この場面では、学んだことが十分に活用でき、自分の力で解決する力を身に付けていたため、周りに相談する必要がなくなったからであると考えられます。

外国語活動の授業実践から

6年生・外国語「I like my town」では、学習に目的をもたせると同時に単元のゴールを魅力あるものにするため、修学旅行先で掛川市の良さを紹介するという、具体的な場面を設定しました。

外国語の活動において、コミュニケーション能力の育成は重要です。子ども同士の関わり合いがより活発になるように、相手の話を聞いたあと、どう反応すればよいか分かるように、表現方法を黒板に掲示しました。

活動が始まると、自主的・意欲的にコミュニケーションを楽しんでいく子が数多く見られた一方、Aさんはどこか不安げな表情をしています。ペアになった子に、準備してあった英文を話しながら、持っていた紙で顔を隠してしまいました。仲の良い友達とのペア活動になって初めて、安心した様子で笑顔を見せたAさん。

全ての子が自信をもって関わり合いの活動をスタートさせるには、一律の活動では難しいと、その後の検討会でも意見が出されました。また「コミュニケーションを広げる」とは、関わる人の数を増やすことなのか、関わる際の語彙のバリエーションを増やすことなのか、教師側も明確でなかったことが明らかになりました。

成果と課題

子どもがすすんで学びに向かうような学習課題にするために、実物の準備や、体験活動の設定によって疑問を引き出したり、活動の見通しをもたせるだけでなく「自分だけの〇〇をつくろう」と課題に価値をもたせるようにしたりするなど、全職員が工夫して取り組んできました。しかし一方で、課題を自分事と捉えられていない子がいました。今後は、課題を自分事として捉えられるように ICT の活用や既

＜魅力ある学習課題の例＞

意外な結果が得られる課題

直感で予想・見通しがもてる課題

色々な解決方法や考え方があある課題

今まで学んできた内容を想起・活用できる課題

比べようとする必然性のある課題

身近な題材について考える課題

習事項の掲示など、視覚的な支援の方法についてもアプローチをしていきたいです。

また、関わり合いについても、課題や答えを確認したり自分の考えを伝え合ったりするためのペア活動や、考えを出し合い視点を広げるための

グループ活動（3～4人）など、意図をもった関わり合いを積極的に設定したことは有効であったと感じています。しかし、子どもと教師との対話に終始してしまい、思考の深まりにつながらないことがありました。子ども同士で考えを深められる対話を成立させていくためには話合いの視点を示すなど、何らかの手立てが必要であることを感じています。

これらを踏まえて、今後は子ども同士の学び合う力の育成のための効果的な支援やその力の評価について研鑽をしていきたいです。

論理的な思考力・表現力の育成

掛川市立原田小学校 池田 健

1 はじめに

本校では、「進んでとことん学び合う子」を研究主題と設定し、算数を研修の窓口としました。「自分の考えをみんなに伝えたい。」「もっと考えてみたい。」

「もっと友達の意見を聞きたい。」と主体的に授業に参加し、友達ととことん意見を出し合い、ぶつけ合い、学び合っていく子どもを育成したいと考えました。

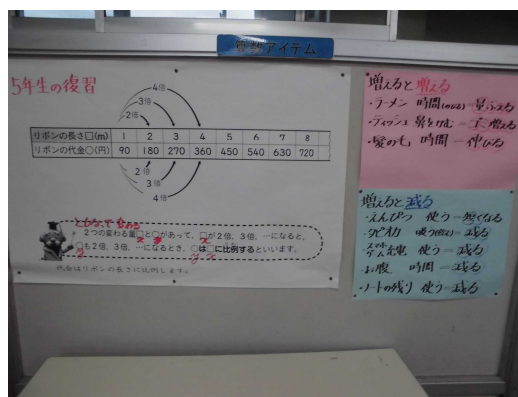
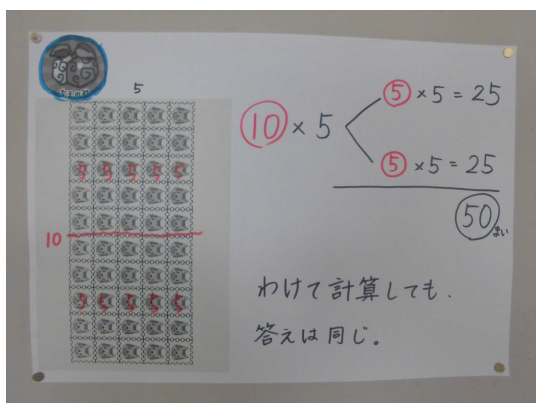
そして、そのような子どもを育成していくにあたり、論理的な思考力・表現力を付けていくことが必要であると考えました。論理的な思考力・表現力とは、子どもが既習学習をもとに、見通しをもち、筋道を立てて、図・式・言葉・操作を使い、自分の考えを作り、表現する力のことです。この論理的思考力・表現力が付いていけば、学び合いも活発になり、より主体的に、とことん学び合い、本時のねらいを達成するだろうと考えました。

2 論理的思考力・表現力を育成する柱

(1) 「算数アイテム」の活用

子どもが新しい問題に取り組む時、考えの見通しをもったり、作ったりするためには、必ず既習学習が基となります。そこで、考えのもとになる既習学習を「算数アイテム」と名付け、この算数アイテムを使って新しい問題を解決する意識を子どもたちにつけようと考えました。

子どもたちは、新しい問題を解くときに、算数アイテムが貼られている掲示板を見て、根拠を明確にした考えを作ることができるようになりました。また、話し合いでも算数アイテムを根拠として友達の考えを説明したり、反対意見を出したりする姿が見られるようになってきました。



(2) つなぎ言葉を活用した言語活動

筋道立てて自分の考えを作ったり話したりするために、「まず」「次に」「そして」「だから」といった「つなぎ言葉」を使えるようにしていく必要があると考えました。そのために、つなぎ言葉を使って書く・話すなどの言語活動を授業の中に取り入れるようにしました。

3年生「わり算」の学習で、「 $36 \div 3$ 」の答えの求め方を発表したAさん。「私は、『知恵の実』（算数アイテムの名前）を使って解きました。まず、36を27と9に分けます。次に、 $27 \div 3 = 9$ 、 $9 \div 3 = 3$ と計算します。最後に、9と3をたして12。だから、答えは12です。」と、つなぎ言葉を使って順序よく説明することができました。

また、2年生「かけ算」の学習で、「 7×8 」の答えの求め方を発表したBさん。「8は4と4にわかれるでしょ。 $7 \times 4 = 28$ で $7 \times 4 = 28$ で、 $28 + 28 = 56$ 。だから答えは56。」「どういうこと?」「例えば、 7×9 だったら、9を4と5に分けるの。 $7 \times 4 = 28$ で $7 \times 5 = 35$ 。」「ああ、そういうことか。」つなぎ言葉「例えば」を使って、別の数で例を示し、みんなに理解してもらおうとしたのです。

3 評価と課題

「算数アイテム」の手立ては、論理的な思考力を育成していく上で有効でした。子どもたちが根拠を持って自分の考えを作れるようになったり、算数アイテムを根拠に話し合ったりする姿が見られるようになりました。何より、子どもたちに、「既習事項を使って未知の問題を解く」という学習のスタイルができあがってきたことが大きな成果です。

「つなぎ言葉を活用した言語活動」の手立ては、計算の方法や筆算のやり方のように、順序立てて説明する時には有効でした。「まず・・・、次に・・・、つまり・・・」のつなぎ言葉を使うように指導していったことで、順序よく説明することができました。一方で、「例えば」「もし」「だったら」のように、発展的・統合的な思考につながるつなぎ言葉を使えるようにはなっていません。順序立てる言葉以外のつなぎ言葉を増やし、使えるように指導していくことで、より論理的な思考力が育成されると考えています。

今年度の研修により、「算数アイテム」「つなぎ言葉」は、論理的な思考力・表現力を育成していくために有効な手立てであることが確認できました。来年度もこの2つの手立てをさらに研修するとともに、プログラミング的思考をもう1つの手立てとし、論理的な思考力・表現力の育成につなげていこうと考えています。

「繋ぐ～共に学ぶ～」を意識した校内研修

掛川市立西郷小学校 太田 愛

1 研究主題と研修内容

掛川市教育委員会より「特別の教科 道徳」の研究校の指定を受け、研究主題を「かかわりながらよりよく生きようとする児童の育成」とし、「かかわり」を自分とのかかわり（自己理解）、他者とのかかわり（他者理解）と捉えた。道徳科の授業において、自分や他者とのかかわりを通して、主体的に自己の生き方を考え、判断し、他者と共によりよく生きるための道徳性を養っていきたいと考えた。

さらに、研究主題を踏まえ、研究内容を「ねらいの明確化」「発問の工夫」「振り返りの工夫」とし取り組んだ。その際、PDCAサイクルを生かして研究を進めることとした。

2 6年生「ロレンゾの友達」の実践

(1) ねらいの明確化

「ロレンゾの友達」で『友情、信頼』の価値項目で行うこととした。さらに児童の実態から、今回はその中の『友情』にねらいを絞り「だめなことはだめと言ったり、友達を大切に思う行動をしたりすることが互いの友情を深めることを知り、よりよい友情を築くためにどうするかについての判断力を養う。」とした。

(2) 発問の工夫

本時では、友情について押さえた後、登場人物の3人の誰の考えに似ているか問い一人一人の立場を明らかにした。さらに、Yチャートを用いて友達と交流する中で3人の行動や思いを可視化し、思考の手助けとした。



Aさんは、初め、お金を持たせ逃がすアンドレに共感し、「友達を裏切りたくない。いつまでも友達でいたい。だから、自分のお金でいいから逃がす。」と発言した。交流では、いろいろな子の意見を聞きながらも、考えは変わらなかった。

その後、クラス全体でそれぞれの立場ごと意見を出し合った。Aさんは、自首をすすめ納得しなければ逃がすサバイユ、自首をすすめ納得しなければ警察へ連れていくニコライの立場の友達の発言を聞きながら、うなずいたりメモをしたりしていた。

教師が中心発問『ニコライは本当に友達思いと言えるのかな。』と投げ掛けると、友達の意見を受け、「友達だからこそ変な道に行ってしまうから自首を進めた。」「3人とも友達を助けないから自首を進めた。」「3人とも友達を助けないから自首を進めた。」と発言した。

ただただ友達を大切にしたいからこそ逃がすと言っていたAさんは、中心発問を話し合う中で、友達のために自首を進めたり、警察へ連れて行ったりすることも友達を大切にしていることなのだと考えを深めることができた。

(3) 振り返りの工夫

後段でもう一度、価値である『友情』について、じっくり考えたり話し合ったりする時間を確保し、自分自身とのかかわりの中で考えを深めさせた。

(4) PDCA サイクルを意識した学年研修

各学年で同じ教材を研究し、授業改善を図った。それをまとめ、次年度も活用できるものにした。

研修の成果として作成されたワークシート。タイトルは「けっまくみんな友達を思っている」。内容は「真の友情」を築くために大切なことに関する問いかけと、生徒の回答が記された部分。回答には「自分のことを考えることができた。」、「友達の話を聞いて、新しい気持ちがあった。」、「これからの生活について考えることができた。」などの感想が記されている。

【6年】研修のまとめ。教材名「ロレンゾの友達」(内容項目 B- (10) 友情、信頼)。研修の振り返りとして作成された資料。研修の目的、実施内容、そして「ロレンゾが罪を犯していたらという前提を元に戻し、考えのポイントをはっきりさせる。」、「授業を重ねる手立てを取ることで、意見の切りかわりを把握しやすくなる。」などの実践内容が記載されている。

3 成果と課題

- ねらいを明確にすることで、ぶれずに授業ができた。
- 1つの教材から視点をもとに多くの発問を考え、内容項目や児童の実態に合ったものを選ぶことで、考え、議論する授業に近づけた。
- PDCAサイクルを生かしながら学年で同じ教材を研修することで深まった。
- 考えを深めるために、中心発問だけでなく、問い返しや切り返しも吟味していきたい。
- ねらいに迫るのではなく、ねらいと向き合う授業にしていくことで、「かかわりながらよりよく生きようとする児童の育成」に繋がると考える。

4 今後の展望

今年度から「特別な教科 道徳」の研究が始まり、研究を進める中で、どの職員も道徳の授業についての理解を深めることができた。だからこそ、よりよくしていくために、課題も見えてきた。来年度は西郷小の目指す道徳の授業とは何かをより明らかにし、研究を進めていきたい。

「説明する力を身につけた子」の育成を目指して

掛川市立倉真小学校 原田 昌

本校では、「説明する力を身につけた子」の育成を目指して、自分の思いや考えを、伝え方を工夫して説明する活動を取り入れた授業を行ってきました。その手だてと成果を紹介します。

1 架空のキャラクターを設定する

2年算数「かけ算(1)」

学習問題 パオン君に正しい式を教えよう。

子どもたちは、自分の式との違いを見つけ、なぜパオン君の式ではいけないのかをグループ毎に話し合いました。クラスの中の誰かが間違えたわけではないので、皆が安心して学びの土台に立つことができました。また、このキャラクターは、今までに何回か登場していたため、子どもたちにも親しみがあり、何とか助けてあげようという思いをもつことができていました。説明する力を身につけるために行ったグループでの話し合いによって、安心して自分の考えを言ったり、分からないことを質問したりすることができていました。発表に苦手意識のある子も、友達と一緒に考えたことだからと進んで話すことができました。また、友達の考えと組み合わせることで、新しい考えが膨らみ、多様な方法を導き出すことができました。思考力を高める上でも、正しい答えを求めるのではなく、「なぜ」と間違いの過程を考えさせることは、効果的でした。



2 異学年の児童などに紹介する

3年国語「もうすぐ雨に」

学習問題 好きだな、おもしろいなと感じたことを伝えよう。

「もうすぐ雨に」のお気に入りの場所を付箋に書き、紹介し合いました。友達の書いた付箋をじっくり読み、「何でそう思ったのか聞きたい」など、自分と違うところを紹介した子に関心をもつことができていました。3～4人のグループでの活動にしたため、どの子も自分の思いを説明することができました。並行読書をした本を司書の先生と1年生に紹介しようと投げ掛けたことで、本への意欲、関心が高まりました。子どもたちからは、「今まで全然ふれたことのない本を読むことができました。これからも、今までふれなかった本も読んでみたいです。」「今までオウマガドキ学園くらいしか読んでいなかったけれど、これからいろいろな本をいっぱい読みみたいです。」「不安になったり、楽しいこ



とがあったり、怖かったり、本ではいろいろなことが起こりました。これからも、不思議なことが起こる本を読み続けたいです。」など、新しいジャンルの本も読んでみたいという感想が多く見られました。本を紹介することで、伝えようという意識を高めるだけでなく、聞いてもらえることの喜びを感じさせることができました。

3 知識構成型ジグソー法の活用

6年算数「分数のわり算」

学習問題 $\frac{2}{5} \div \frac{3}{4}$ の計算は $\frac{2}{5} \times \frac{4}{3}$ をすればいいことを説明しよう

知識構成型ジグソー法を取り入れた学習活動を組みました。エキスパート活動で、H君は、 $\frac{1}{4}$ あたりの量を求め、それを4倍する方法について考えていました。

H君：「何で分母が15になるの？」

K君：「 $\frac{1}{4}$ で塗れる面積が $\frac{2}{15}$ なんだよ。」

H君：「何で 5×3 なの？」

K君：「だって $\frac{1}{4}$ が3個分で $\frac{2}{5}$ 塗れるんだから、
1個分だったら、 $\div 3$ じゃん。」

H君：「 $\div 3$ なのに15なの？」

K君：「 $\frac{2}{5} \div 3$ は、 $\frac{2}{5} \times \frac{1}{3}$ だから、 5×3 で15だよ。」

H君：「あっ、そうか。K君、ありがとう。」

ジグソー活動では、計算の決まりを使って求める方法に対して、「何でそこで $\div 1$ するのかな。」と質問していました。S君が、計算の中に矢印などを書きながら再度説明しました。「やっぱり、何で $\div 1$ するのか分からない。」とそれでも聞き返しました。今度は、Aさんが「だってさあ、ここがこうなるじゃん、分かる？」「それからここを計算するとどうなる？」「ここまで大丈夫？」とH君の反応を確かめながら説明しました。すると「ああ、分かった。」と納得できたようでした。

クロストークの後、H君が「何でわる数を逆数にするの？」と質問しました。答えを求められても、求めるための手順と計算方法が、思考の中で繋がらないようでした。

納得するまで考えたい、分かりたいという子どもの思いと、そのような子に対して分かってもらおうと一生懸命説明する仲間。子ども同士のかかわる姿が多く見られました。



対話を通して考えを深める授業を目指して

掛川市立土方小学校 渡辺 智美

1 はじめに

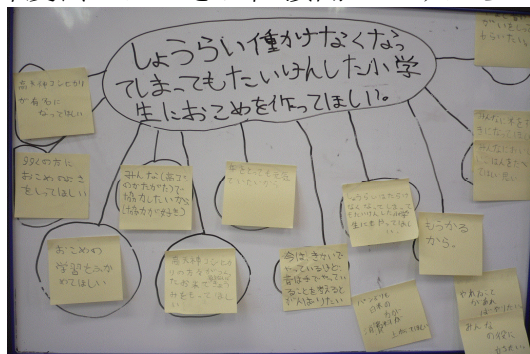
本年度、小中一貫教育研究の授業を行うにあたり、どのような授業を行えば研修主題である「対話を通して考えを深める授業」になるかを考えました。研修主題を達成するために、①主体的に学ぶ学習課題の設定と②学びを深める交流の仕方に重点を置いて研修を進めました。

2 実践

○主体的に学ぶ学習課題の設定「自分ごとという意識の向上」

5年生総合的な学習の時間、土方地区で育てられている「高天神コシヒカリ」を材として授業を行いました。社会科で学んだ稲作農家の苦労や自分たちが行った田植え体験から、「米作りは大変だ」という思いをもつ子どもたち。人ごとではなく、自分ごととして学習を進めていきたいと考え、「高天神コシヒカリの皆さんは、どんな思いで米作りをしているのだろう。」という学習課題を設定しました。

- A お米が大好きだからかな。
- B だから、米作りが好きなんじゃない？
- C それで私たちに教えて、米作りを広めたいのかもしれないね。
- A 5年生と米作りを一緒にして、その楽しさを知ってもらって、大人になってお米農家になってほしいからだよ。
- C 私たちだけじゃなくて、世界中の人に米作りの楽しさを伝えたいかもしれないね。
- B 食べる人が減っているお米も守っていききたい気持ちももっていると思うよ。
- A うーん、じゃあぼくたちの考えは「お米が大好き」にしよう。
- 全 「お米が大好き」「おいしいお米を作りたい」「お米の本当のおいしさを知ってほしい」「若い人に米農家になってほしい」
- T いろんな考えが出てきたけど、「高天神コシヒカリ」の皆さんの思いはどれなんだろう。
- D 今度会ったときに直接聞いてみたらいいんじゃないかなあ。



まさに、「自分ごと」として考える姿が見られました。

○学びを深める交流

6年生外国語、交流をすることによって学びを深めるために取り組んだことは、

- (1) 交流の視点を明確にする。
- (2) 交流している様子を客観的に判断する。

の2点です。(1)の「視点を明確にする」ために、メインの交流活動に入る前に、どのようなことを意識するのかを確認しました。年度の初めは、good voice やアイコンタクトなど話し手の視点多かったですが、後半になると good reaction を中心とした聞き手の視点多くなりました。また、交流している様子をタブレット等の ICT 機器を使って撮影し、自分がどのようにコミュニケーションをとっているかを確認する時間を設けました。時には話し手、聞き手の他に、観察する人を設定し、コミュニケーションの様子についてアドバイスを送るようにしました。



学びを深めるための交流について

○「土方地区の良さについて伝える」という個人の課題を大切にしながらも、交流の視点を明確にすることで、本時のねらいに迫りやすくなりました。また、交流活動の途中で良い表れの児童を全体に紹介することで、どのようにすれば相手に伝わりやすくなるのか視覚的に理解できました。

○友達の良い姿だけでなく、客観的に撮影した自分の姿を見てみると、自分が想像していた姿と全然違うことに気付くことができました。また、友達が見てくれる場合には、これまでに自分が意識してきたところとは違うところについてアドバイスをくれるケースがあり、一つのことをより深くしてだけでなく、広がりをもってレベルアップすることができました。

▲交流をする場面では一対一を基本としましたが、撮影したり様子を観察したりする人を設定すると3人組になることが多かったです。さらに、様子を確認しアドバイスを送る時間も必要となるため、交流の時間が短くなってしまいました。



対話を通して考えを深める授業

掛川市立佐東小学校 竹内 洋介

P 学び合う集団にするために

<目指す授業像>

安心して何でも言い合える学級経営、本音で語る特別の教科道徳を基盤とした

対話を通して考えを深める授業。

<目指す子ども像>

主体的に、本音で関わり、力の限り「まなんでいく子」

<城東学園の共通実践>

D 城東学園での共通実践を生かして

<よりよい小集団活動にするための土台づくり>

- ① 座席の隊形はコの字型を基本。
- ② 学習班の人数を3人。T字隊形。
- ③ 『まなボード』を使用。
- ④ 司会者カードの使用。

○昨年度と同様、授業中に小集団活動を積極的に行った。児童は、流れが分かっているのでスムーズに対話することができていた。

○司会者カードを作成したことで、誰が司会者になってもある程度対話を進めることができた。

▲黙って話を聴くこと、自分の考えをもつことはできている児童が多い。しかし、意見を言うだけで終わってしまい、考えが深まらないことが多かった。

<考えを深めるための手立て>

- ① 発問の工夫（学習問題、中心発問）
- ② 問い返しの技術
- ③ 構造的な板書への挑戦



○特別の教科道徳では、多くの授業でテーマ発問を中心発問とすることで、道徳的価値について深く理解しようとする児童が増えた。

○考えが深まらず、一つの意見で授業が進んだときに、教師が「それって、どういうこと？」「〇〇しても本当にいいの？」などと問い返しをすることで、児童が立ち止まり、多面的・多角的に考えることにつながった。

○横書きの板書にしたことで、中心発問に対して意見がつけやすくなった。

＜ 考 え を 深 め る 児 童 の 姿 ＞



6年 特別の教科道徳「ロレンゾの友達」

ロレンゾが警察から追われているという情報を得た友人三人は、ロレンゾがもし罪を犯していたらどうするかを話し合っていたが、その後、無実であったと知る話。

「本当の友達とは？」という中心発問で、三人の友人の友情観をおさえていった。Aさんは、「僕は、アンドレの考え方

こそ、本当の友達だと思う。だって、仲良くしてきた友達が警察に捕まるのは、かわいそうだから。」と話した。同じように、BさんとCさんも、自分が共感した人物と理由を述べたが、誰が本当の友達か決めることができなかった。

小集団活動を終えて、改めて「本当の友達は誰なの？」と発問した。多くの子どもたちが共感する人物の名前と理由を挙げた中、Dさんは、「誰が一番とか二番とかってあるの？」と発言した。子どもたちは考え込み、静かになってしまった。すると、Fさんが、「考え方は違うけど、三人とも、ロレンゾのことをよく考えているのは同じ。だから、三人とも本当の友達だと思う。」と話した。クラス全員が、「なるほど！」とうなずいた。最初は、本当の友達が誰か一人選んでいた子どもたちが、友達のことを心から考えていれば、考え方が違っても本当の友達なのだと考えるようになった瞬間だった。

C 成果と課題

- 特別の教科道徳を窓口にして研修したことによって、教員が発問を考えたり、問い返したりする力が向上した。これは、どの教科にも生かすことができた。
- 城東学園小中一貫教育研究で、3小学校1中学校が小集団活動での共通の手立てを実践したことで、中学校へのスムーズな接続が可能となった。
- ▲小集団活動のときに、自分の意見を伝えるだけで終わってしまい、考えを深める場にならなかった。児童の話す・聴くスキルの向上はもちろん、話し合う必然性がある問いになるように授業づくりをしていくことが大切である。

A 来年度に向けて

来年度は以下の3つの視点が研修を進める上で重点になると考えている。

- ① 話し方・聴き方のスキルの向上。
- ② 対話する意欲を引き出す発問や問い返しの工夫。
- ③ 考えを深めるための思考ツールの活用。

対話を通して考えを深める授業

掛川市立中小学校 富井 美帆

1 対話の必然性のある学習問題

5年生の総合的な学習の時間、「中地区プロモーション」の学習場面です。子どもたちはこれまで、自分たちの住む地区にはどんなものが有名であり、知られているものは何か、また知られていないものは何かについて調べました。その中で、地域で歴史的に価値のある『中村砦』が、地域の人にも知られていないことに気づきました。そこで、「中村砦を有名にするためには、自分たちの力で何ができるか考えよう」という学習問題を設定しました。



教師：なぜ、中村砦は有名ではないのでしょうか？

A：きれいになってないからだよ。

B：目印もなにもないからだと思うよ。…

学習問題「中村砦を有名にするためには、自分たちの力で何ができるか考えよう」

【小集団での対話へ】

①C：有名にするには、ポスターを作ったらどうかな。それをお菓子屋さんのところに貼ってもらったらみんなわかると思うよ。

D：パンフレットみたいなものを作ったらどうかな。どんなところなのかわかると思うよ。

E：でも、ポスターを作る前に草取りなどしてきれいにしなければみんなが来てくれても困ると思うよ。（有名にするためには、広報的な活動だけでなく整備の活動も必要であるということに気づく。）

②F：みんなが来てくれた時に遊べるように遊具を作ったらいいと思うな。

G：遊具があったらいいと思うけど、それって自分たちの力だけではできないよね。（自分たちの力でできることに絞って考える。）

F：確かに、遊具は作れないよね。他に自分たちでできることはあるかな。

③H：リーフレットみたいなものを作ったらどうかな。

I：まず、誰に知ってもらいたいかな。中小の他学年の人に知ってもらうのか、それとも地域に住んでいる人に知ってもらうのか、それによっても方法は違うよね。（有名にするためには、誰に知ってもらいたいのかを考えることで、より具体的な活動を考えることにつながる。）

この後、子どもたちは「自分たちの力でできることは何か」を考え、様々な活動を考えてことができました。子どもたちの「どうしても言いたい。」「ちょっと聞いて…」という思いが出てくるような学習問題を設定していくことで、対話の必然性が出てくることがわかりました。

2 対話の工夫

6年生の総合的な学習の時間、「夢学習」の学習場面です。これまで、様々な仕事をしている方を講師として招き、生き方についての話を聞いてきました。その中で、職業が違って同じような考えをもって働いている人がいることやそれぞれの生きていく上で大切にしていることなどがわかってきました。

【前時】講師の方の生き方についての話を聞く。

学習問題「どのような思いや願いをもって働いているのか」

【小集団での対話へ】

A：チームワークが大切だと言っていたけど、それには信頼も大切だと思ったよ。だから、チームワークと信頼はつながっていると思うな。

B：確かにそれは大切だね。私は、自分の好きなことをやっていたことが仕事につながるのってすごいことだと思ったよ。子どもの時に習い事としてやっていたことが仕事につながることもあるんだね。

C：『出る杭は打たれる 出ぬ杭はくさる』って言ってたけれど、ぼくは自分の意見を言わない方だから、少しは出ることが大切だと思ったよ。

D：ぼくも『出る杭は打たれる 出ぬ杭はくさる』という言葉が心に残ったよ。



年間に複数の講師から話を聞き、共通点や相違点などについて小集団で話し合う活動を繰り返すことで、働くことの意味につなげて発言したり、自分の未来を想像して話を聞いたりすることができました。対話をすることによって考えを深めることにつながりました。



【小集団で話し合ったことを全体で共有する】

E：『自分のやりたいことをやる。』と『みんなの意見を取り入れる』は反対のことを言っていると思います。

F：私は、それは反対のことではないと思います。なぜなら、『みんなの意見を取り入れる』というのは、自分の意見もあってそれをさらに良くするために良い意見を取り入れることだと思うからです。

E：確かに、自分に必要な意見を取り入れるならそうかもしれない。



小集団で話し合ったことを全体で共有し、小集団の対話では解決できなかったことについてさらに考えを深めることにつながりました。

「心の鐘が響く授業の時間」

掛川市立大坂小学校 柘植 未来

1 分かった！できた！を実感する子の育成を目指して

本校では「共に学び合い、わかった！できた！を実感する子」の育成を目指して研修を行ってきた。昨年度から、共に学び合うための手立てとして、「心をゆさぶる問い」を意識し、進めてきたが、「問い」の言葉にしばられてしまい、学習問題を設定しづらかった。そこで昨年度の課題を踏まえて、今年度は「心をゆさぶる問い」に限定せず、「心をゆさぶる教材との出会い」も含めた授業研究を行った。

夏季研修では、上半期の研修の振り返りを行った。その中で、課題を「解決したい！」と子どもが熱心に取り組む段階までに至らなかったという課題が出てきた。そこで、子ども達の学ぶ意欲を向上するための問いとはどういうものかを全体で追っていくために、問いの良さの共通点を全体で見出していった。また、「分かった！できた！」とはどういった場面のことを言うのか、あいまいな部分があったことから、第2回の中心授業では抽出児童を選出することにした。このように、子どもの姿から、学び手である子どもにとって切実感のある問いを明らかにする研修形態にしていった。

2 事例 1 分かった！できた！を実感した授業 (1年 算数)

学習問題 $9 + 4$ はどうやってけいさんすればいいのだろう



この問題を考えさせる際、教師が「今までと違う所や同じ所はあるかな。」と前時との違いを計算問題から考えさせた。今までは $10 + 3$ や $10 + 5$ といった 10 のまとまりの足し算を行ってきたが、本時では 10 のかたまりが無いことに児童が気づいた。このように、前時との違いを意識させることで意欲が高まり、解決した時の「分かった。」「できた。」「そうか。」という声が多く聞かれた。

・「分かった！できた！」につながる導入の問いかけの事例

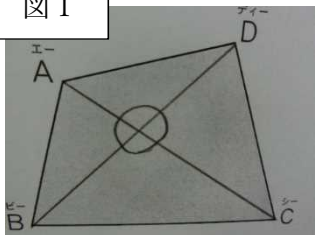
前に出てブロック操作を児童Aが行った際に、児童Eが「Aさんはブロックを1個ずつ数えているよ。」と気づいた。そこで他の児童が「Bさんも1個ずつだけど、ブロックを9に1個動かしてから数えているね。」と反応し、「Cさんは1個動かしてから 10 のまとまりにしているよ。」「Bさんは『あわせて』って言った。」「1個動かしたのを矢印で書いているから『あわせて』ってことじゃないかな。」と子どもたちの発言が繋がっていった。

全体で「分かった！」を共有するためには、この事例のように導入部分で、前時との比較や、自分たちでどのように計算すれば良いか予想を立てさせてみるのが効果的であった。

3 事例2 一人の「分からない」が全員の「分かった」に

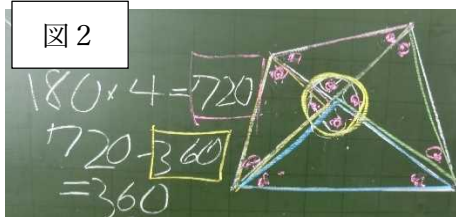
つながった授業 (5年 算数)

図1



四角形の内角の和を問う問題を全体で解決していった。4つの角を切って並べる子、それぞれの角を測って足してみる子など、いろいろな考えが出てきた。その中で、児童Aは、「対角線を結んだら 360° の円が出来たんだけど、ここからどうやって説明すればいいかわからないんだよね。」と

図2



言い困っていた。(図1)そこで、周りの児童が「みんなに聞いてみて解決しようよ。」と言い出し、全体で協議することになった。すると、児童Bが「和が 180° の三角形が4つあるでしょ。4つ全部足すと、 720° になるよね。真ん中の 360° の部分

は関係ないから、 $720^\circ - 360^\circ$ をすると 360° になるよ。」と答え、だいたいの児童は納得できた。(図2)しかし、「先生まって!!〇〇さんがまだ、はてなんだよ。」という児童Dの発言を受け、「それじゃあ、もう一回誰かが、ゆっくり説明してよ。」「ぼく分かったから言いたい。」「私も発表したいな。」との声が次々と挙がった。そこで、児童Eが図に赤い〇を書きながらゆっくり丁寧に説明していった。この学級では、分かったら手で丸を作り、分からなかったら三角印を作っている。(図3)一人の「分からない」が全体に広がり、誰もが説明できるようになり、深い学びにつながった。



図3

○今年度の成果と課題

成果

- ・既習事項と比べることで、課題やめあての設定に繋がった。(事例1)
- ・視点のズレや認識のズレを共有化することで、全体で追求する学習問題につなげることができた。(事例2)
- ・意図的な授業の形態(グループ、ペア、トリオ)を意識したり、反対、賛成で意見をぶつけ合うなどの対比を意識したりすることで目的意識をはっきりともって取り組むことができた。

課題

- ・全校的に話し合い活動ができるようになってきている一方、話し合い活動で意見を練り合えないグループへの支援が必要。
- ・教師対児童になりがちな話し合いを打破すべく、ねらいを明確にした問いを追求していく必要がある。

これらを踏まえ、来年度は、ねらいを明確にした単元構想を考え、必然性のある課題や問い、話し合いの場を設定することを意識して研修を行っていく。

「主体的に学び合う子」を目指して

掛川市立千浜小学校 諸星 江里

1 はじめに

本校の研修テーマは「主体的に学び合う子」である。このテーマを実現するために、昨年度は、1時間の流れがわかるようミニホワイトボードに書いて提示し、板書は全クラス、学習問題を『赤枠』、まとめは『青枠』で囲み、ユニバーサルデザインを意識した授業に取り組んだ。児童が主体的に学び、学びの実感がもてるよう、必要感のある考えたくなるような学習問題を設定したことで、意欲的に学習に取り組む姿が増えてきた。また、1時間の授業の中に交流の場を設定し、発達段階に応じて交流の仕方を工夫することで、友達と学び合う姿が広がりつつある。

そこで本年度は目指す子どもの姿を①自ら課題を見つけて対話しながら高め合う子②教科の用語を適切に使って考えたり説明したりして課題を解決し、学んだことが活用できる子とし、児童が主体的に学び合える授業を目指して研修に取り組んだ。

2 実践

(1) 必要感のある問題の設定

4年「角の大きさをはかろう」では、動物の口の大きさを調べるといふ課題を設定し、導入で前時までの違いを共有させた。ヘビの口が動くようにした物を使用し、既習の角度から徐々に大きな角度に広げていくことで、「180度よりも大きくなったよ。」「分度器だと測れないな。」といったつぶやきから学習問題へつなげることができた。



3年「3けたのたし算とひき算」では、単元を通して友達が作った問題を解くという目的を設定したことで、単調になってしまいがちな計算問題も、解きたいという意欲をもって取り組むことができた。



(2) 習得した知識・技能を活用し、自分の言葉で伝える



5年「What would you like?」では、単元を通してチャンツやドリル活動をくり返し行った。単元で扱う英語を繰り返し発音したり聞いたりすることで、他者と関わって活動する際にも、学んだ言葉や表現を用いて活動することができるようにした。実際にどの児童も自信をもって英語でコミュニケーションをとることができていた。

3 成果と課題

<成果>

- ・必要感のある学習問題の設定に取り組んだことで、児童にとっての「必要感」とは何か、どんな場合に必要感を感じるのかを全体で共有することができた。学習問題を具体的に理解できていれば、展開の部分での意欲にもつながった。
- ・学んだ知識を使って説明しようとする児童が増えた。
- ・まず、次に…等の説明の言葉が使えるようになってきた。

<課題>

- ・研修仮説の「対話しながら考えを高め合う」ところまで深めることが難しかった。
- ・友達に自分の考えを伝えようという意欲は感じられるが、文章力・語彙力が足りず、うまく考えを伝えることができていない児童が多い。
- ・単元を通して個の見取りが不十分だった。
- ・学び合いに全員が参加できなかった。

4 来年度に向けて

今年度の成果・課題から、①学びを深めるための教材研究②意欲的な対話にするための仕掛けの2点を研修していくことの必要性が見えてきた。来年度も研修主題を「主体的に学び合う子」とし、今年度までに培ってきた話し方・聞き方を生かしつつ、互いの考えを伝え合うことによって自らの学びが深まる姿を目指したい。

聞き合い学び合う全員参加の授業づくり

～子ども一人一人の学びを保障する「学び合い」を目指して～

掛川市立横須賀小学校 阿形 竜馬

1 はじめに

本校は、平成31年度（令和元年度）より、『聴き合い学び合う全員参加の授業づくり』を目指して研修を進めている。「伝え合い（聞き合い、話し合い）」に重点を置き、聞き方・話し方、共有・ジャンプ（発展的）の課題の設定、グループ活動を通して考えを深める等の指導に力を入れてきた。

また、本校の目指す『学び合い』は以下の3つであった。

- 「分からない」「教えて」が言えて、共に解決しようとする姿がある。
- 仲間の言葉に耳を傾けて聴く。質問して訊く。
- 得意な子どもも苦手な子どもも、1人残らず授業に参加する。

○ 実践

(1) 3年生 外国語活動「I like blue. すきなものをつたえよう」

I 子どもが「やってみたい、考えたい」と思えるような場面や課題の設定

好きなものを伝える単元では、自分の好きなものを伝えるだけでなく、「同じくだものや野菜が好きな友だちをさがそう」という課題を設定した。同じものが好きな相手を探すという設定にすることで、「たくさんの友だちに聞いてみたい。」という意欲を高め、参加しようとする気持ちが高まっていた。

II 課題に参加するための個への指導

Activityや Main Activity に自信をもって取り組むために、各時間の Drill でも様々な工夫を行った。言う順番を変えたり、練習のリズムを速くしたり遅くしたりしながら十分な聞き慣れと言い慣れができるようにした。

III ペアやグループなど学習形態の工夫

家族のためにカードを作成する活動では、一人一人が欲しい形を考えて、「Red circle please」という表現をつかって欲しいものを表せるようにした。スリーヒントクイズをつくる活動では、児童の実態から、ペアで相談してヒントを考えることで、自分ひとりで考えることが難しい子どもも参加できた。



(2) 2年生 算数「かけざん(3)」

I 「やってみよう!」「考えてみよう!」と思わせる課題設定

単元の最後に、「職員全員が、旅行に行くとするなら…」と、数を29人に変えて、課題を設定した。身近な存在を問題に取り入れ、考えやすい課題を設定したことで、子どもたちは興味をもつことができた。問題を共通理解するために、ブロックを置いて確認し、視覚的に板書で表すことも取り入れた。

II 子どもの思考を助ける算数的活動と教具の工夫

19人を座席にブロックを分けていく操作活動をするため、板書と同じ座席表をワークシートにした。ワークシートの上にブロックを置いたり、動かしたりしたので繰り返し試すことができ、次々と考えをつくり進めることができた。

III ペアやグループで学び合う活動の設定

新幹線で行くという設定は変えずに、19人のときと同じ座席のワークシートを使用し、グループで相談しながら問題解決に向けて取り組んだ。



○ 成果と課題

グループ活動において、自分の考えを積極的に伝えようとしたり、友だちの話を一生懸命に理解しようとしたりする姿が多く見られるようになった。中には、困っている友だちに教えている姿も見られた。

その反面、全体に対する話し方や、友だちの発表の聞き方・反応の仕方について課題が明らかになった。考えはもっているが、自信がなくて発表の声が小さくなり、友だちに対して考えを伝えられない、友だちの発表を最後まで聞けない、友だちの発表に対して自然な反応をすることが少ない等の課題である。また、『学び合い』の柱の一つであった「ジャンプの課題」の設定の在り方についても課題が残った。「子供たちに教科書の内容を定着させることが精一杯であるのに、教科書の内容を越える「ジャンプの課題」を設定することが本当に効果的であるのか。教科によっては設定しづらいのではないか。」といった課題も出た。

○ 来年度に向けて

令和2年度は、聞き方や話し方、反応の仕方を身につけさせ、より深い学びにつながる活発な話し合いを目指す研修を進めていく。そして、子ども同士で「できた」「わかった」を共有できる『横須賀小学校学び合い授業』を目指していきたい。

「自ら考え 自分の言葉で伝え合う子」を育てる授業を目指して

大淵小学校 石田 智子

はじめに

学校教育目標「かがやく大松の子」、重点目標「みがこう自分を 高め合おうみんなで」を受けて『自ら考え 自分の言葉で伝え合う子』を育てる授業」を研修テーマに掲げ、「主体的な学びを生み出す単元構想」「追求意欲を高める発問」「視点を明確にした交流」の3つの柱で研修を進めました。窓口教科は学年部で決め、中心授業研4回、学年部研4回を行いました。中心授業研には外部講師を招いて、授業改善に努めました。

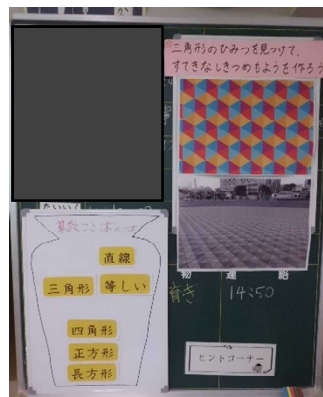
また、事前研の前に、研修部と学年部で単元構想を検討したことで、授業者は単元全体の見通しを深め、より一層児童の意欲や思考の流れを意識して単元を計画したり、授業案を作成したりすることができるようになりました。

第4回中心授業研「3年生 算数科『三角形』」の学習場面をもとに研修の3つの柱について、子どもたちの学びの姿を説明します。

子どもが主体的に学ぶ「単元構想」と「発問（学習課題と学習問題）」

子どもの学習意欲をかき立てる手立てとして、単元の初めに三角形を組み合わせた模様を見せました。すると、子どもたちは、その模様の美しさに「自分でも描きたい。」という思いを持ちました。そこで、単元のゴールを示す学習課題「三角形のひみつを見つけて、すてきな敷き詰め模様を作ろう」を設定すると、子どもたちはその後の学習に主体的に取り組んでいきました。

本時の導入では、単元のキャラクター「さんまるちゃん」が登場し、前時に子どもたちが作ったたくさんの三角形の中から9個の三角形を選んで仲間分けする課題「三角形を3つの仲間に分けよう。」を提示しました。



- T 「今日は、3つの仲間に分けるよ。」
C 1 「できるな。」(9種類の三角形を見てつぶやく。)
T 「どうやってわけたらいい？」
C 1 (挙手後、黒板の前に出て)「色とかは関係ないけど形で分かる」
C 2 「ぼくは、大きさだと思う。」
C 3 「私は、2つの同じ長さの色で分ければいいと思う。」
T 「う～ん、今、注目しているところがみんな違うよね。」
C 「うん。……。」

ここで注目するのは、C 1です。普段は一斉の授業の中で取り組むことを苦手としている児童ですが、課題提示の後にすぐつぶやいたのです。それだけ、本単元に意欲を持っていることと本児にとって見通しがもちやすい課題の提示だったと言えます。

学級全体では、(どうすればだれもが同じように分けられるのかな。)という問題意識が出たところで、学習問題「どこに注目したら、仲間分けできるかな。」を設定しました。

子どもの思考を助ける「一人学び」と「視点を明確にした交流」

まず、全員に分類する枠を書いたワークシートと自由に動かせる9枚の三角形カードを配付して、一人学びをしました。分類に困る子は、設けられた「ヒントコーナー」に行き、組み棒でできた三角形を実際に操作して考えました。一人一人の手元に教材があるので、子どもたちは自由に動かしながら自分の考えを作っている姿が見られました。



また、ヒントコーナーに集まった子どもたちの間では、実物を見たり、向きを変えたりしながら、自然に相談や意見交流が始まり、考えがまとまってくると自分の席に戻ってワークシートに向かう姿が見られました。



自分の考えができた後の交流タイムでは、「自分と同じ・似ている考えの子は☆、新しい考えには！のマークをノートにメモしながら聞く。」という視点を与えました。子どもたちの中から「ちょっと違うから！マークかな。」というように自分の考えと比べながら聞く様子が見られました。

全体での話し合いの場面です。子どもたちが注目したところは、主に「形」「色」でした。子どもの中には、「スイカグループ、おにぎりグループ、サンドウィッチグループ」「同じ色グループ、カラフルグループ」等と名前を付けている子もいました。

そこで、教師は子どもたちの考えを整理しながら、「“色”によって長さが違う。」という子どもの意見を引き出し、さらに「三角形として見ると“辺”の長さが違う。」と置き換えられることを押さえました。そして、本時のまとめを全体で「辺の長さ注目して分けると、3つの仲間に分けることができる。」とノートに書き、チャレンジ問題を出して理解の定着を図りました。



単元構想の充実+追求意欲を高める教師の発問=主体的な子どもの学び

研修の成果は、3つ挙げられます。1つ目は、単元構想を十分練ったり、発問を吟味したりしたことで、みんなで授業をするという雰囲気うまれました。2つ目は、短時間で印象的に課題を共有できるように工夫したことで、子どもが学習の見通しをもって前向きに取り組むようになりました。3つ目は、子どもの思いに添った学習問題が解決への意欲づけになり、自然な相談や目的意識をもった交流につながりました。

当たり前を続けるための地道な挑戦の連続

今年度、どの学年の児童も友達と関わりながら授業をみんなで作る姿が多く見られるようになりました。しかし、わからないことを臆せず発信できなかつたり、語彙力が不足するため思うように自分の言葉で伝えられなかつたりすることが課題として残りました。それは、全体での深め合いにも影響してきます。子どもについてきた力を維持・向上させるための工夫と、研修の課題解決に向けて目の前にいる子どもの表れをもとに最善の手立てを模索しながら研修を進めていきたいと思ひます。

進んで関わり学び合う生徒の育成

掛川市立栄川中学校 大石 優子

研修の重点「学び合い」

昨年度より「学び合い」についての研修を積んできている。小集団活動の質的な向上を図るため、学習問題が適切であったか、また、交流活動は目標に迫る有効的な活動となっているのか等を検証した。また、以下のような視点をもち授業を組み立てた。

- ①学習問題（深く追究させたい問い）を設定し、まず一人でじっくり考える時間を確保することが、生徒の問題解決能力の向上につながる。
- ②小集団活動で互いの意見を交わし議論することにより、生徒一人一人の深い学びやコミュニケーション能力の向上につながる。
- ③「学びのUD」の視点（焦点化、視覚化、共有化）に立った支援をすることですべての生徒を学びのステージに立たせることができる。

【 お も り X の 質 量 は 何 g だ ろ う 】

3年 理科

単元名 力の大きさとばねののび

本時の目標 おもりをゴムにつるした時のゴムののびを調べ、ゴムに加わる力とのびの関係について考察する活動を通して、未知のおもりの質量を推測できる。（科学的な思考）

A 「Xの質量を量らずにどうやって重さを求めるのだろう？」

【答えを求めたいという思いが強く持てる焦点化された学習問題である】

B 「他の3種類のおもりとゴムののびで推測できるかも」

【どのように求めるかの材料が準備されていて解決への糸口が見える】

A 「実験すればわかるのかな」

T 「実験は3回までとします」

B 「まずXをつるしてみよう」

C 「ゴムは18cm伸びたよ」

A 「0.5 N、1 N、1.5 Nのどのおもりをつるす？」

B 「あと2回しかできない。0.5 Nでやってみよう」



- C「5 cm伸びた。この後どうすればいいのだろう」
 B「ばねののびと加える力は比例関係だから、グラフを作れば予測できるかもしれない」

【実験やその結果をもとにした考察に意欲的、主体的に取り組めた】

- C「グラフをどう書けばいいのかわからない」
 B「点をつなげばいいんだよ。おもりの質量とゴムののびには規則性がある。そこからXの重さが予測できることになる」

- C「あー、わかってきたかもしれない」

【考察できない生徒は、班での話し合いが思考の助けとなった】

- A「でも比例にならない。ゴムだから誤差が出てくるのかな」

【さらに追究しなければ答えにたどりつかない学びの楽しさがあった】

- B「データミスかな。もう1回実験してみたい」



生徒たちは、実験結果から個々にグラフを作成し考察した。しかし、ゴムの伸びにより誤差が生じるため比例の直線ではなく曲線となってしまう。つまり、一人一人の答えに違いが出る。そこで、さらにデータを増やすことが必要だと気付く。簡単には解決しない問題に対して、思考を深め粘り強く追究する姿が見られた。また、小集団活動により教え合うことで全員参加の学びが実現した。

来年度に向けて

単元の学びを通して「主体的・対話的で深い学び」に迫っていくために、本時の学びが目標に迫るものとなっていたのかを生徒の姿（あらわれ）で検証し、教師の手立ては有効であったのか考察していく。

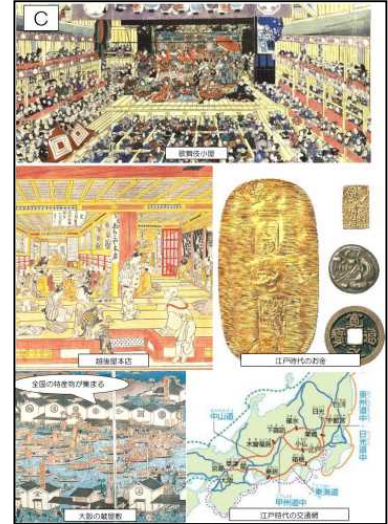
年度当初、学習指導要領を元に各教科における「主体的・対話的で深い学びの捉えを固め、授業における具体的な姿をイメージする。これが生徒にとっても、教師にとってもゴールになる。全教科の捉えを全職員で共通理解し、主体的・対話的で深い学びについて理解を深め実践していきたい。

きき合って学ぶ「学び合い」の授業

掛川市立東中学校 杉山 晃弘

1 ジグソー法を取り入れた「学び合い」の授業

2年生社会科、歴史的分野の中の近世の日本における「農業や諸産業の発達」を教材とした授業です。生徒全員が参加できる仕組みとして「ジグソー法」を取り入れた非常に提案性の高い授業でした。授業の目標は、「江戸時代中期の様子を示した風俗画や資料から、それらが当時のどのような様子を伝えているかを読み解き、仲間と伝え合う活動を通して、江戸時代中期の特色を多面的・多角的に捉えることができる。」です。以下には、生徒Aの授業中のワークシートへの記述やつぶやき、発言の記録を示しました。



【ジグソー資料C】

学習形態	生徒Aのあらわれ（ワークシートへの記述・つぶやき・話し合いでの発言）	
個人 （資料C担当）	歌舞伎を見てる。越後屋本の店…本を売ってる？ 移動するための交通網ができた。お金を使うようになった？	
エキスパート	本を作り始めた？あ、本店なの？ これ何してると思う？ 越後屋って何？服を売ってるのか…。 これ新しいお金でしょ。小判。 お金が使えて、交通網もできた。船も。 いろんな場所に行けるってこと。	
小集団 （ジグソー）	資料Aは農地面積とかお米の生産量が増えた。農業がさかん。 機械ができて楽になった？ 資料Bは特産品ができて、大阪にその特産物を集めた。 儲かってたんじゃないかな。効率よくできるから。 しょうゆとか加工品もできた。	
個人まとめ①	新しいことが始まっている。日本独特の文化。 効率的で便利になった。 差別がやさしくなった？農業がさかん。遊びも増えた。 はやく話し合いたい!!	
小集団 （クロストーク）	業種も増えて、収入も増えて、生活に余裕が生まれた。 自由になって、よりよい生活になった。 生活が豊かになったってこと。歌舞伎とかがあって楽しい時代!!	
一斉	ゆとり…自由…平和…。納めなくてもいい特産物。 前期と比べて中期は…。	
個人まとめ②	江戸時代前期では、差別をしたり、どんなことでもルールづけをしたりしている世の中で、人々の自由を奪っていた。しかし、中期になると、人々は、稼ぐためにいろいろなものを作りになり、日本特有の文化や特産物が増えた。生活は楽になり、楽しくなった。	

個人→エキスパート活動→ジグソー活動→クロストーク→個人の流れの中で、生徒Aが対話を通して新たな情報を得ながら、自分の考えを広げ、深めている様子がよくわかります。ジグソー法を用い、生徒同士が互いの考えをつき合わせて「きき合う」時間を確保することで、「学び合い」ができ、生徒一人ひとりの多面的・多角的な見方・考え方が養われていきました。

2 コミュニケーション活動を生かした「学び合い」の授業

昨年度から受容的に聞くスキルトレーニングを「コミュニケーション活動」として毎週金曜日の朝に全学級で行うことにしました。昨年度、生徒に対してアンケートを行ったところ、「コミュニケーション活動を行うことで、相手の話を受容的に聞くことができるようになったか」という質問に対して、もともと聞くことが得意な生徒は、85%が「できるようになった」



(とても・まあまあ)と回答し、聞くことが苦手な生徒についても、67%が「できるようになった」と回答しました。また、全体の82%が、「受容的に聞くことで、考えが広がったり、深まったりすることを実感できた」と回答しています。今年度は、この身に付けたスキルを授業内で生かすことのできる取組として、「小笠の文集」に提出する原稿作りの授業を取り上げ、生徒同士が書くことを具体的にするためのペア活動を設定しました。

実践では、右図の①～⑤に示したように、質問を重ねていき、相手が書こうと思っていることを具体的にしていきました。

普段から書くことがほとんどできない生徒Bは、作文のテーマを決める第1時で、「家族」をテーマにすることを決めたものの、発想を広げるウェビングマップでは、「父、母、兄、弟」などを羅列することに終始していました。しかし、このペア活動を通して、生徒Bのワークシートには次のような記述が加わりました。「自分のことで書くことは、悪いところやその対策について。家族のことで書くことは、家族の良いところ、悪いところや家族との体験。例えば、兄弟げんかのことなど」。ペア活動中の生徒Bは、生き生きとした表情を見せ、自分のことについて質問されること、自分の話を聞いてもらえることがとてもうれしい様子でした。活動後、生徒Bは意欲的に構成メモを書いていた。

話し手は、聞き手が受容的な姿勢を見せることで、「認めてもらえた」という実感を持ちます。そして、質問に答えることで、考えが広がったり、これまで意識してこなかったことに気づいたりします。今後も「コミュニケーション活動」で身に付けたスキルを授業の「学び合い」に生かす実践を重ねていきたいです。

インタビューの手順

- ① 「あなたは、作文を読む人にどのようなことを伝えたいと思っていますか。」
※書き手の意図を明確にする質問
- ② 「この作文を読む人にはどう思ってもらいたいですか。」
※読み手を意識させる質問
- ③ 「作文には、どのようなことを書こうと思っていますか。順番に話して下さい。」
※書くことと思っていることを具体的にする質問
※ここで話し手にたっぷり話ししてもらおう。「通り話してもらったら、話の内容についてインタビューをする。」
- ④ 「次の時間、下書きにスムーズに入れようですか。」
※次の活動のイメージをもつための質問
※もし「いいえ」という答えが返ってきたら、どのような課題なのか聞いてあげる。
- ⑤ 「私に話したことで、作文に書こうと思うことは具体的にになりましたか。」
※活動がねらいを達成できたかを確認する質問

《活動終了一分前》

【ペア活動の流れ】

生徒が自ら学ぶ授業を目指して

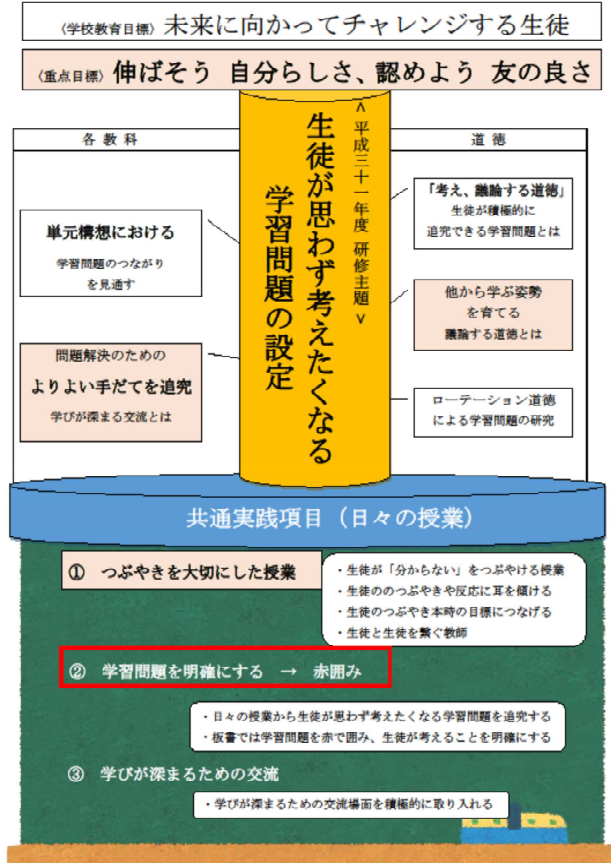
掛川市立西学校 長谷川 景子

1 研修テーマと設定の理由

本校は素直で真面目な生徒が多く、やり方がわかったことに対しては、進んで取り組める生徒が多い。そこで本年度は、生徒の主体性や自主性をさらに伸ばすために、学校教育目標を「未来に向かって、チャレンジする生徒」と掲げ、特活部、生活部、学習・研修部の3指導部が共に「生徒が主役として輝く学校」を目指して取り組んだ。研修部では、「生徒が自ら学ぶ授業」を目標に、授業の核となる学習問題に焦点を当て、「生徒が思わず考えたい学習問題の設定」を研修主題に授業改善に取り組んだ。

単元のテーマや学習問題	学習の流れ	軸	生徒の思い・生徒の実態
1. 和歌の基礎知識を身につけよう ①	【音韻についての知識・理解・技能】 ・百人一首にチャレンジし、和歌と出会う。 ・単元ガイダンス。 ・和歌の種類を学習する。 ・和歌の表現技法を学習する。	和歌の調べ学習を通して、和歌独特の表現のよさを読み味わう	・和歌にはいくつかの分類や表現技法があるんだ。そして、それらを理解することで、和歌が表現している情景や心情がわかるんだ。 ・3つの時代による表現の特徴の変化があることがわかった。万葉集は直線的、古今和歌集は技巧的、新古今和歌集は婉曲的に表現しているんだ。
2. 担当した和歌の魅力を理解しよう ②③	【読む能力】 ・班ごとに担当の和歌を決める。 ・和歌ごとに与えられたテーマについて考える。 例：どのように板の美しさを表現しているのか。 ・問いに答えるために、資料（プリント、本、ネット）を調べる。 ・発表会（歌合わせ）に向けて調べたことをまとめる。		・和歌の現代語訳や解説を調べたら、今では考えられない時代背景がわかった。書かれている心情を理解するためには、時代背景やその人が置かれている状況を捉えることも大切なんだ。 ・平安時代の恋愛の仕方を見ると、登場人物が行っている行為は激しい愛情表現であるということがわかった。
3. 和歌の魅力を比べよう ④⑤（本時）	【音韻についての知識・理解・技能】 ・班ごとにテーマに沿って和歌の魅力を紹介する。（歌合わせ） ・テーマごとの和歌で、どれが最もふさわしいかを考える。 例：どの和歌が一番板の美しさを際立たせているのか。 ・「どの和歌の表現の仕方が一番好きか」多数決をとる。それにより、歌合わせの勝者を決定する。 ・感想を交流する。		・それぞれの和歌から伝わってくる情景や心情を比べると、技法の巧みさや情景の美しさ、心情の豊かさがより伝わってくる。 ・比べることで、和歌が作られた時代によって、表現の仕方に特徴があることがわかった。 ・今度詩をつくる時には、古今和歌集のように技巧を用いて、気持ちの奥深さを伝えるようにしたいな。 ・百人一首にある他の和歌にはどのようなものがあるか気になったな。調べてみよう。
単元を通して目指す生徒の姿 和歌の表現技法や現代語訳が分かったことで、和歌に書かれた昔の人の心情や情景を読み取ることができた。昔の人も現代の人と同じように恋愛をしたり、自然に親しんでいたりと分かった。一方で時代によって表現の特徴が異なると分かった。技法や意味を調べて、昔の情景や昔の人の気持ちに寄り添ってみよう			

H31年度 掛川市立西中学校 研修構想図



2 具体的な研修の手だてと成果

(1) 生徒の姿で授業を構想する “単元構想図”の導入

授業を通して、生徒の思いや考えがどのように変化し、単元を通してどのように生徒の学びがつながり、深まっていくのかを可視化する単元構想図を作成した。校内研修では、単元構想図を持ち寄り検討した。このような単元構想図を作成したことで、「こういう生徒に育てたい」という意識をもって授業づくりができた。単元を生徒の姿で見通すことでゴールが明確になり、1時間毎の付けたい力もはっきりした。

(2) 生徒が自ら学ぶための、つぶやきを大切にしたい授業

「生徒が自ら学ぶ授業」の基礎として、つぶやきを大切にすることを共通実践項目とし日々の授業で取り組んだ。気軽に意見を出し合える雰囲気が学級内にでき、物静かな生徒でもつぶやけるようになった。またこのつぶやきを大切にしようという意識から、生徒主体の授業を目指す教員の意識も高まった。

(3) 「道徳科」と「各教科」の両輪研修

本年度より教科化となった「特別の教科道徳」を通して、級外も含めたすべての教員で生徒が思わず考えたくなる学習問題の設定について追究する研修を前半に取り入れた。学年ごと1つの教材を選び、2グループに分かれて授業案を立てた。それぞれのグループでできた授業案で授業を公開し事後研修を行った。

学習問題の違いにより、生徒の表れにどのような違いが見られるかを検証することができた。また考え議論する道徳について話し合い、イメージすることができた。

道徳科 第1学年 教材『いじめにあたるのはどれだろう』



3 来年度に向けた課題

「つぶやき」とは、対話的な授業づくりのためであり、対先生のものではない。生徒同士のつぶやきでも談話では「学びが深まる交流」とは呼べない。来年度は「つぶやき」について教員間で再確認すると同時に、学びが深まる交流について、その方法や教員のファシリテーション力を伸ばす研修を行っていきたい。

深い学びを達成するために

掛川市立桜が丘中学校 辻元 智

1 目指す姿へ～深い学びのある授業～

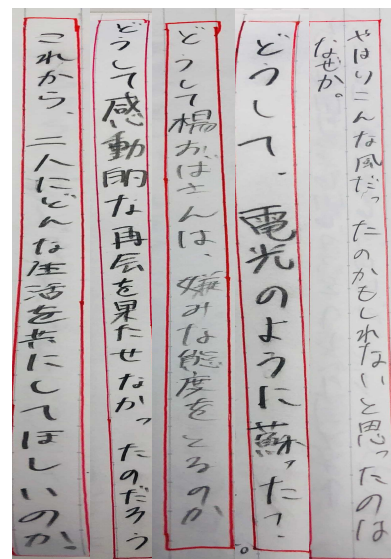
本校生徒の目指す姿として、「粘り強く思考し、学び続ける生徒」「伝え合い、他者の意見を取り入れる生徒」がある。目指す生徒像に近づけるため、本校の研究テーマを「深い学びのある授業」と設定した。そして、単に知識を受動的に詰め込んでいく学びに終わらせず、「課題解決のヒントや新たな価値観を他者と与え合い、自分の考えと照らしてよりよい解を探っていく学び」や「知ったことを生かして自ら次の課題に対処しようとする学び」を作り出す授業を目指した。

2 発問の質の大切さ

3年生の小説教材「故郷」の学習を取り上げたい。「故郷」は、背景にある当時の中国の社会情勢を理解しながら、これまで積み重ねてきた読解力と想像力を駆使し、登場人物の心情を味わう単元である。読み応えがあり、中学校における小説教材の集大成とも言える。この教材を通して、小説を読む面白さを味わい、さらに、社会の在り方や自分の生き方を考え続ける人間になってほしいという願いを込めた。また、私自身にとっても、「故郷」を1年間の研修の集大成としたいと考えた。

単元目標は、「当時の中国社会の中の登場人物の心情の読み取りを通して、これからの社会の在り方、自分の生き方について考えていくこと」である。その姿を実現するため、5つの中心発問を用意した。中心発問は、全て「魯迅がこれから求める生活を考えること」につながり、最終的には、今後の世界、社会に目を向けた、自分自身の生き方についての振り返りが出てくることがねらいである。生徒は、どの課題にも活発に思考し、他の意見を取り入れようとしていた。それは、この中心発問の答えが本文の様々な箇所から想像できるからである。

発問の質は、生徒の意欲に大きく影響する。この問いは目標の達成に向かっているか、対話の必要性は生まれるかということをおきながら設定することが求められることを再確認した。



3 学びを深める振り返り

単元の振り返りでは「登場人物の心情について」「これからの世界や日本について」「今後の自分の生活について」という視点で行った。本来ならそれを次時に紹介して単元終了という流れであるが、振り返りをさらに深めるため、「振り返りトーク」という交流会を行った。書いたノートはできるだけ見ず、相手の目を見て自分の言葉で伝える活動を行った。聴き手は、話し手がどれだけ時間がかかっても、頷きながら最後まで聴くというルールを設け、質問の時間をとった。

つまずきながらも何度も言い直し、あきらめずに最後まで話している姿に、成長を感じた。また、発表が終わってからも、時間の許す限り登場人物の思いや、これから自分たちが歩む生活などについて活発な対話を行っていた。対話を行った後、再び単元の振り返りを書かせたところ、最初の振り返りよりも更に深まった感想が見られた。

4 次年度に向けて

今年度、研究テーマ達成に向けて、「発問」「対話」「提示資料」「つなぎ」「振り返り」という5つのチームに分かれ研究を行った。どれも大切な要素であるが、1年を通し、深い学びに導いていくための研究を進めるにあたって、中心発問、補助発問が最も重要だと改めて感じた。問いが魅力的であれば、生徒は自然と思考し、交流を求め、答えを導いていく。逆の場合、なんとか理解させようと教師が主導になる傾向になる。

来年度も、本校生徒の目指す姿「粘り強く考え続ける姿」「**他者の意見を取り入れる姿**」の達成に向かい、生徒の学びの姿を想定して授業をつくっていきたい。

＜ 振り返りトークを終えての最後の振り返り ＞

時代の移り変わりは早い。中国も日清戦争前はある程度裕福だったのに、戦争に敗れると廃れてしまった。

「平家物語」にあるように「たけきものもついには滅びてしまう」怖さがこの世界にはある。そして、信じていた友や隣人に急に裏切られることもある。しかし、魯迅はそんな中でも「時代を先導して中国人の意識を変えていこう」という強い意志をもち続けた。いつの時代も新しいものをつくっていくのはこのような人たちだ。そして、これからの日本を作っていくのは私たちだ。私が皆の道しるべとなるのは難しいかもしれないが、先導者達の力になれたらと思う。

今も各地で争いが起きていて、当時の中国と今の世界は似ている。環境が人の心、人と人の関係を変えてしまうことは悲しい。魯迅の願いは、現代社会においても私たちが傷つけ合わないためのメッセージだ。私にできることは優しさをもつことだと思う。互いの文化や価値観の違いを認め合えるよう、まず私が広い心をもちたい。その心が広まり、いつの日か、世界の人々が幸せを手にする世の中になってほしい。

他者の考え × 自分の考え = 深い学び

掛川市立原野谷学校 梅田 晃

1 主題研究について【Research & Plan】

原野谷中学校では研究主題を平成 30 年度より「他者の考えを理解した上で、自分の考えを分かりやすく伝えることができる生徒の育成」と設定し、授業づくりに努めています。これは、本校の生徒が他者（友達、教員、教材）からアウトプットされる情報に対する感受性が乏しいこと、さらにそれらの情報をインプットし、自分の考えと練り合わせた上で、アウトプットすることに慣れていないことを課題としていることによります。

第 1 回の校内研修会において、全教員で原野谷中生が抱える課題について改めて検討し、研究主題を設定します。また、教員個々の経験や教科の特性を考慮し、図 1 にあるように、全教員が研究主題に迫るための「仮説」「手立て」「評価方法」を決定し、それらを基に 1 年間授業実践を積み、年度末には「研究のまとめ」を作成します。これにより、全教員が同じ方向を向いて授業づくりを推進することができます。

表 1 仮説・手立て・評価方法一覧表

教科名	担当	仮説	手立て	評価方法
国語科	山本	読解関係能力、対人関係能力、因果関係能力の習得・活用ができれば、文章（得意）と感情（得意）の力が高まり、目的意識が育成されるだろう。	①3つの関係能力を習得・活用させる。 ②読解の場として小説読解を設定する。	4つの観点（話す・聞く・書く・読む）において、読解を3つの関係能力に分類し、その能力を評価する。
社会科	大石	授業に新えたり、丁寧にわかりやすく説明したりすることで「わかった」が実感できれば、自分から発信したいという思いをもった生徒を育成できるだろう。	①問題・題材による活性化 ②難しい語句を小学習にもわかる言葉で説明する。 ③具体物操作やロールプレイによる実感を伴った理解を促す。 ④関心を持って説明する時間を設定する。 ⑤生徒が自分の言葉でまとめる場面を設定する。 ⑥関心を持って話し合う活動を設定し、表現させる。	①場内での相互評価や他者の発表を聞いて学習態度を評価する。 ②他者の発表内容を決定し、発言内容により評価する。
数学科	西村	図・表・式・グラフを用いて説明したり、読み取ったりする活動ができれば、目的意識が育成できるだろう。	①学びが深まる課題の設定。 ②少人数・小集団活動の積極的活用。 ③多様な他者の考えを活動の設定。	①学習する場面での説明内容。 ②ワークシートや振り返りシートの記述。
理科	高倉	コミュニケーション活動を通して、自分の思ったこと他者に説明したり、また他者が話している内容を理解し、そのことについて質問することができたりすることができるようになれば、目的意識が育成できるだろう。	①文章を声に出して読解活動の設定。 ②読解に必要な読み方などについて、内容を把握する活動。 ③お互いに、テーマに沿って発言する役、発言を聞く役を設定したコミュニケーション活動の実施。	振り返りシートの記述
音楽科	森下	自分が表現したい主題や作曲が表現したい主題を音楽、言葉にしたり、音に表わしたりする場面を設定することで、目的意識を育成することができるだろう。	①観察や想像の前段階で、結果を予想したり仮説を立てたりし、それでの考えを理由をつけて伝える（仮説含む）場面を設定する。 ②観察や想像の場で、結果に対する考えを理由で言い、文章やモデル図などを用いて伝える（仮説含む）場面を設定する。	①ノートやワークシートに自分の考えをまとめる欄を設定し、十分に時間を確保した上で、その記述内容を評価する。 ②ワークシートに、記述内容の理由で表す読解を出題し、その記述内容や理由による表現力を評価する。
保健体育科	三浦	他者の考えを聞き、自分なりの考えをもって、実践することで、より理解を深め、主体的に取り組むことができるだろう。	①生徒の発表する場面を多く設定し、他者の考えを聞く機会を多くする。 ②小集団で課題の向上についての話し合いの場面を設定する。	①学習シートに他者の考えや自分の考えを記入させる。 ②自分の考えを表現する上で評価する。 ③振り返りシートに自分の考えを記入させる問題を出題し、表現力を評価する。
美術	田村	他者の考えや、授業での疑問を聞き、自分の考えや、気持ちを表わすことで、その考えや気持ちを表現する場面を設定することで、表現力が豊かになり、目的意識を育成することができるだろう。	①生徒の発表する場面を多く設定し、他者の考えを聞く機会を多くする。 ②小集団で課題の向上や疑問についての話し合いの場面を設定する。	ワークシートや振り返りシートの記述。
外国語科	中山	他者と交流したり他者の意見を聞くに際しては、中立的で、新しい表現や考え方を取り入れることで、表現力が豊かになり、目的意識を育成することができるだろう。	①小集団活動で他者の意見を聞く場面を設定する。 ②他者の意見への感想など、自分の考えを述べさせたり書かせたりする。	①ワークシート等に自分の考えを記入する欄を設ける。 ②振り返りシートに自分の考えを記入させる問題を出題し、表現力を評価する。
	梅田	他者の考えに対し、自分の考えや疑問を言いつつ、その考えや疑問を伝える場面を設定すれば、目的意識を育成することができるだろう。	①生徒がまとめる。意見を言いたくなる学習課題（問題）の設定 ②他者の意見を聞いたり、読み取ったり後に自分の考えを書く場面を設定する。 ③具体物を使用した発表の指導	学習シートに自分の考えを記入させる問題を出題し、表現力を評価する。同時に手立てが有効であるかを評価する。

「仮説」「手立て」「評価方法」を決定し、それらを基に 1 年間授業実践を積み、年度末には「研究のまとめ」を作成します。これにより、全教員が同じ方向を向いて授業づくりを推進することができます。

2 実践【Do】

(1) 外国語科【授業名：〇〇さんを紹介しよう。】

本授業は 1 年生外国語科の授業実践です。「簡単なメモをもとに、家族や自分の好きな人物についてまとまりのある内容で発表をすることができる」という目標の下授業が行われました。ペアでお互いにスピーチのアドバイスをし合うことで、新しい表現や考え方を取り入れる機会と



なり、自分のスピーチをより分かりやすく伝えることができる生徒の育成につながることを期待されました。実際の授業では、生徒たちは、互いにスピーチを聞き合い、改善点を挙げながら、よりよいスピーチを目指して練習に励んでいました。友達の意見や考えを取り入れ、自分の考えと練り合わせ、さらによりよい表現を目指していこうとする姿が見られました。

(2) 理科【授業名：水溶液の性質】

本授業は1年生理科の授業実践です。原野谷中は原田小及び原谷小との小中一貫教育に取り組んでいるため、これを意識した授業内容です。本時の目標は「物質が水に『とける』現象に対する小学生の考え方を検討し、勘違いや間違いを正していく活動を通して、物のとけ方について分かりやすく説明することができる」です。



小学生が、「物が水に『とける』こと」に対して「消えてなくなってしまうと思う」「水の中に散らばってしまったのではないか」と考えたことに対して、中学校の学習内容を根拠に、小学生が理解できるよう、分かりやすく説明するにはどうしたらよいかを考えました。生徒たちは、「教科書の写真を使って、科学的な説明を付け加えれば分かりやすいと思う」「ノートに書いた粒子のモデルがあるから、この図を使って分かりやすい解説を加えたらどうだろう」「教科書の写真より、資料集の写真の方が分かりやすい」などと相手を意識した考察をし、「(図を示しながら)水にとけた物質は、目に見えないほど小さな粒となって全体に同じように散らばっています」と説明することができました。

家庭科の保育実習で自ら作成した絵本で読み聞かせをする生徒。

3 まとめ【Check and Action】

以上のように、全教員が研究主題に掲げためざす生徒像に向け授業づくりに励んでいます。このような実践の積み重ねにより「他者の考えを理解した上で、自分の考えを分かりやすく伝えることができる力」はもとより、新学習指導要領で謳われている基礎的・基本的な知識及び技能、思考



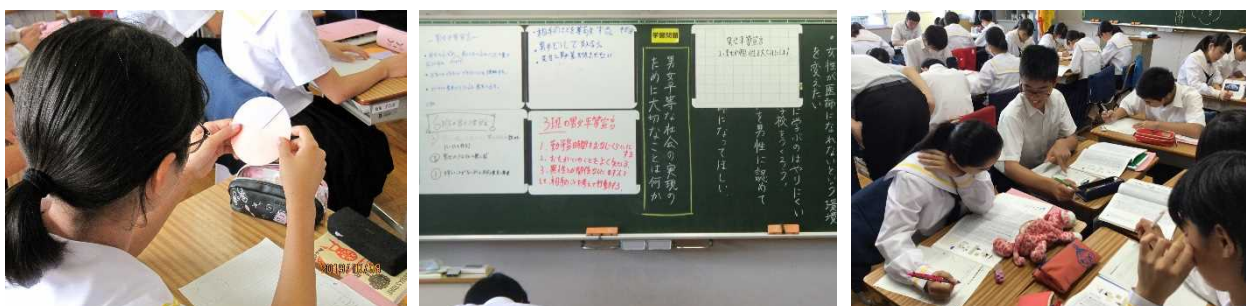
力・判断力・表現力、そして主体的に学習に取り組む態度が生徒たちに育まれてきていると捉えています。今後は各教員が、自らの授業づくりを省察し、次年度に向けた課題を新たにし、さらなる授業改善に努めていきます。新しい時代を力強く歩んでいくことができる子どもたちの成長を願いながら...

「議論する」授業展開

6月の提案授業の振り返りから「議論する」ことに注目し、授業展開の工夫を試みた。考える時間の確保も必要ではあったが、後半の議論や振り返りの時間が不足してしまうという意見も多かったため、授業前段に中心発問を移し、生徒の議論する時間を確保した。発問の精選はテンポの良い授業展開を生み出した。そして、「議論する」ための手立てとして2つの工夫に取り組んだ。

1つ目は、思考ツールの利用。心情円やミニホワイトボードで自分の考えを表し自分と異なる考えの人との交流を図った。同じ賛成の意見の中でも、100%賛成の人と60%賛成の人では考え方は異なり、自分の考えを深める事ができた。

2つ目は、小集団学習の利用。本校の昨年度までの研究の積み上げとして、小集団学習があった。議論する場面で4人の小集団グループを活用した。自分の考えを伝えるだけでなく、「私もAさんと同じ行動をしようと思う。でも、気持ちはAさんと少し違うかも」など、他者と比較し、さらに考えを深めていく姿も見られた。そして、議論した内容を全体で共有することでさらに意見の交流ができた。



「北中型道徳スタイル」で育てる豊かな心

「生徒の本音をなかなか引き出せない」「生徒同士の積極的な交流がつかれない」「考え、議論する道徳とは何か」これらは年度当初、本校職員が抱いた「考え、議論する道徳」への不安と課題であった。しかし、そこから1年間、新たな取組や工夫を加え、全教員が一丸となり「北中型道徳スタイル」を定着させていった。その成果として、教師の授業への意識変容のみならず、生徒の道徳授業への意識変化も見られた。

生徒アンケート項目	1学期	2学期
道徳の時間が好きだ。	42%	44%
道徳の時間で、相手のことをよく考えるようになった。	45%	48%
道徳の時間で、自分のことをよく考えるようになった。	55%	60%
道徳の時間に考えたことを日常で実感したことがある。	32%	40%

今年度の取組は、教員の意識向上や実生活における生徒の思いやりのある行動にも表れていた。道徳科の実践が「豊かな心」の育成につながることを信じている。

「対話を通して考えを深める授業」

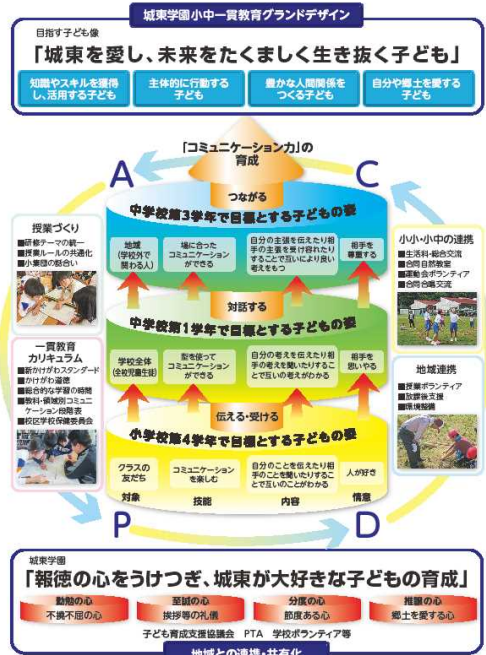
を目指して

掛川市立城東中学校 小杉 栄乃

1 小中一貫教育研究

城東学園（城東中、佐東小、土方小、中小）では、小中一貫教育研究において、小中9年間で目指す子ども像を、「城東を愛し、未来をたくましく生き抜く子ども」としました。この子どもの姿を実現させるために必要な力は何かと考え、研究の重点を、「コミュニケーション力」としました。仲間と対話することで課題解決をはかり、豊かにコミュニケーションをとることができるようになれば、自信や主体性が生まれ、未来を生き抜くたくましさへとつながると考えました。

私達は、小中9年間で三つの段階（①小1～小4、②小5～中1、③中2～中3）に分け、それぞれの成長段階での子どもたちの目標とする姿を年代別コミュニケーション段階表にまとめました。さらに、それをよりどころとし、9年間を見通した教育活動ができるよう、外国語活動・外国語、特別の教科 道徳、総合的な学習、国語の各教科・領域で一貫教育カリキュラム作成しました。そこに、前述の年代別コミュニケーション段階表に基づき、各教科・領域で付けたい力と具体的なコミュニケーション力をまとめました。



年代別コミュニケーション段階表

対象	小学4学年で目標とする子どもの姿	中学1学年で目標とする子どもの姿	中学3学年で目標とする子どもの姿
知識	地域(学校外で)に関わる人	地域(学校外で)に関わる人	地域(学校外で)に関わる人
授業づくり	研究テーマの統一 授業スタイルの共通化 単元(単元)の統一	研究テーマの統一 授業スタイルの共通化 単元(単元)の統一	研究テーマの統一 授業スタイルの共通化 単元(単元)の統一
一貫教育カリキュラム	教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム	教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム	教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム 教科・領域別カリキュラム
学校外での活動	学校外での活動 学校外での活動 学校外での活動	学校外での活動 学校外での活動 学校外での活動	学校外での活動 学校外での活動 学校外での活動
地域連携	地域連携 地域連携 地域連携	地域連携 地域連携 地域連携	地域連携 地域連携 地域連携
生活科	生活科 生活科 生活科	生活科 生活科 生活科	生活科 生活科 生活科
総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習
国語	国語 国語 国語	国語 国語 国語	国語 国語 国語
外国語活動・外国語	外国語活動・外国語 外国語活動・外国語 外国語活動・外国語	外国語活動・外国語 外国語活動・外国語 外国語活動・外国語	外国語活動・外国語 外国語活動・外国語 外国語活動・外国語
道徳	道徳 道徳 道徳	道徳 道徳 道徳	道徳 道徳 道徳
特別の教科	特別の教科 特別の教科 特別の教科	特別の教科 特別の教科 特別の教科	特別の教科 特別の教科 特別の教科
総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習	総合的な学習 総合的な学習 総合的な学習

教科・領域別コミュニケーション段階表

	小学1年	小学2年	小学3年	小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年
外国語活動・外国語	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力
道徳	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力
国語	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力	付けた力

2 授業実践～学びを深める小集団活動

研究の重点である「コミュニケーション力」を意識して授業づくりを進めるために、研修テーマを「対話を通して考えを深める授業」に設定し、城東学園全体で共通の手立てをもって授業改善に取り組みました。

① 人数は3～4人 ② T字隊形 ③ ホワイトボードの活用

学年・教科（中学2年・英語）教材名（未来表現を使って、会話作りをしよう）

【夏休みの予定について話す内容の会話を考える】



〇〇さんと△△さんの会話にしよう。まずは、「何をする予定か」聞きたいから “What are you going to do during the summer vacation, 〇〇?”

「夏祭り」に行く場面にしよう。どんなことを聞いていく？

次の質問は・・・「どのくらいの期間？」って聞きたいから “How long are you going to stay in Tokyo?”

何をするか、何を食べるか、何を見るか、誰と行くか、とか？

何を、なら What are you going to なんとか、だよね。誰と行くってどう言うの？ Who is ...?



【成果】・友達とアイデアを出し合って、英文をつくることを通して、未来表現の使い方の理解が深まりました。

・学習班で教え合いをすることにより、一人一人の理解度が上がりました。

【課題】・対話の時間を十分に確保できれば、英文の内容がより深まっていくと考えられるが、十分ではなかったと感じました。

・英文の内容を深めていくために、様々なパターンの質問をインプットしておく必要がありました。

生徒の学びを大切にする校内研修

掛川市立大浜中学校 沢田 佳史

授業の主役は生徒

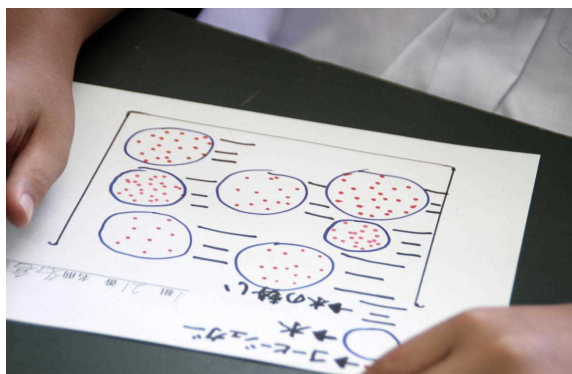
大浜中学校の研修の柱は「人を大切にする」ことです。教師は教室の生徒全員に力を付けるために一人一人の学びを大切にします。全員が「わかった、できた」と力が付いたことを実感する、そのような学びをつくることを目指し、大浜中は生徒の学びを見取ることには力を入れて研修を進めました。

今年度1回目の中心授業研究会は2年生社会科でした。「食料自給率は何%にすべきか」について多面的・多角的な考え方を育むための授業が行われました。



今回の授業で授業者が指示を出したり、説明したりする時間はわずか10分程度でした。それ以外の時間は生徒が主役です。「何で100%なの?」「あぁ～確かにそうだね。」「でも、0%でもいいんじゃない?」など、自分とは異なる多様な考えをもつ仲間と意見を交換することで、自分の知識を別の知識と関連づけたり、情報を整理整頓して考えをまとめたり、新たな気づきや疑問を生んだりしていました。このような時間が十分に確保されていたからこそ、生徒は様々な資料を根拠にして多面的・多角的に考察することができたのです。

2回目の中心授業は1年生理科でした。付けたい力は「微視的な見方・考え方」です。生徒は自分なりにコーヒーシュガーが水に溶ける様子を粒子モデルを用いて表しました。



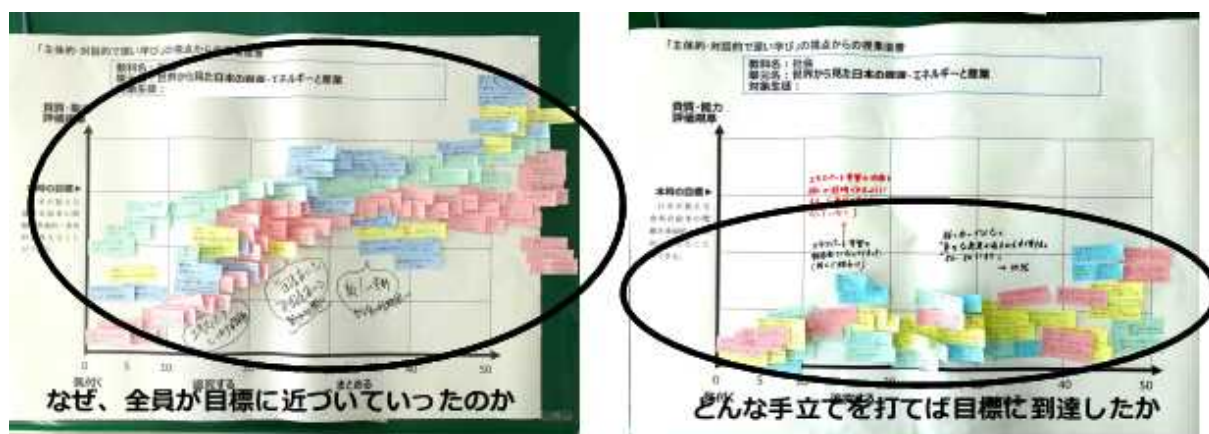
「なんでそうなるの？」や「私は～って思ったからこうした」など、根拠を尋ねたり、自分なりの根拠を明らかにして説明したりする姿が見られました。この姿は微視的な見方・考え方を働かせている姿であると感じました。

また、このような授業では、多様な考えや表現が生まれます。だからこそ、教師には生徒たちの考えを上手につなぐファシリテーション力が求められます。授業者は30分にも及ぶ一斉の時間を設け、生徒の考えを練り合わせました。特に、途中で投げかけた発問「コーヒースユガーの位置は？」「(粒子は)動いている？」は生徒らの思考を揺さぶり、議論させることにつながりました。生徒たちの粒子がまるで見えているかのように語り合う姿は微視的な見方・考え方がよりいっそう働かされていると感じました。

すべての生徒に力は付いたのか

一見うまくいっているように見える授業でも、生徒一人一人の学びに目を向けると付けたい力が引き出されていないこともあります。大浜中の中心授業研究会では教師1人が生徒1人の学びの様子をすべて記録し、付けたい力が引き出されていたかどうかを分析しました。

下の図は1回目の中心授業研究会で作成した事後研修シートです。グループ学習によって班員すべてが多面的・多角的に考察できるようになっている班もあれば、そうでない班もあります。「話し合いが活発にできていたから授業は成功」と判断することは決してせず、常に「その授業で生徒一人一人に付けたい力は付いたのか」を生徒の学びの姿から振り返り、効果的な手立てを考える必要があります。



すべての生徒に付けたい力を付けるための授業を目指して、今年度の校内研修で培った生徒の学びを見取る力を発揮し、来年度の大浜中学校はさらなる授業改善に努めます。

「学び合い」の実現を目指して

掛川市立大須賀中学校 池谷 貴弘

追究したい問いに対し、主体的に深く学ぶことができる生徒を目指して

本校では、生徒同士がお互いにコミュニケーションを取り合い、「分からない」「教えて」が言える学習集団を目指しました。教室の座席配置や小集団活動などを工夫し、仲間の言葉に耳を傾けて聴いたり、自ら質問して思いや考えを伝えたりできる学習課題や学習環境を追究してきました。



学び合いの実現のために

今年度は講師に佐藤雅彰先生（元富士市立岳陽中学校長）を招聘し、「学びの共同体」の理念・手法を学び、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しました。3回の中心授業と公開授業週間（9月）を設け、互いの授業を見合いました。また、3回の中心授業を保幼小中合同研修として公開し、様々な立場の先生方と一緒に授業改善について意見交換をしました。



ペア・小集団活動を積極的に活用する授業

【1年 国語】

単元名 いにしへの心に触れる

授業名 一番真剣にかぐや姫と結婚したかったのは誰か 「竹取物語」より

本時の目標 根拠を明確にして自分の考えを伝えたり友だちの意見を聞いたりする活動を通して、自分の考えを再構築することができる。



～学び合いの Point～

- ①前時までに登場人物のエピソードを細かい部分まで読み込んでおき、それぞれの立場に感情移入がしやすいようにする。
- ②文中の「どのような場面」で「どのような行動」が根拠となるのかを、明確に言えるよう古文（本文）に線を引かせる。
- ③異なる意見の生徒が意見交流できるように意図的なグループ分けをしておく。
- ④話し合いでは役割分担を指定して全員が参加できるようにする。

～生徒の様子～

古典を身近な結婚相手を選ぶというテーマで扱い、自分事としてとらえられていた。自分とは違う視点での読み取りをしている生徒同士が相手を納得させようと真剣に意見の交流をしている姿がみられた。

【3年 英語】

単元名 Total English Lesson6 Interesting Languages

授業名 おすすめの作品を友だちに紹介しよう

本字の目標 電話でおすすめの作品を紹介する会話活動を通して、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができる。



～学び合いの Point～

- ①携帯の実物を用いて、活動への意欲を向上させる。
- ②1回ごとに箱からカードを引き、設定を変えることで様々な状況をつくる。
- ③ペアを次々に変えながら、会話にチャレンジする。
- ④回数を重ねるたびに、何も見ずに話すこと、キーワードリピート、繋ぎ言葉、反応、質問、感想と会話を意識させるための項目を提示して、良い例を全体に紹介する。

～生徒の様子～

自分のおすすめの作品（漫画、TV、映画、本など）を扱うことで、一生懸命相手に伝えようとする姿がみられた。ペアで繰り返しの活動をすることで、新たに単語や表現を獲得して、すぐに次の会話に活かすことができ、授業の終わり頃には表現に磨きがかかっていた。